



第
473
集

青森県埋蔵文化財調査報告書 第473集

米山(2)遺跡VI・宮田館遺跡VII

米山(2)遺跡VI 宮田館遺跡VII

—県新総合運動公園建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

二〇〇九・三

青森県教育委員会

2009年3月

青森県教育委員会

米山(2)遺跡VI 宮田館遺跡VII

—県新総合運動公園建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2009年3月

青森県教育委員会

序

青森市東部の宮田・矢田地区が、青森県新総合運動公園の建設予定地となったことを受けて、青森県埋蔵文化財調査センターでは平成8年度から同地区に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。

平成19年度には米山(2)遺跡の第7次調査及び、宮田館遺跡の第8次調査を行いました。

調査の結果、米山(2)遺跡では、県内一の発見数を誇る中世の井戸跡・カマド状遺構に加え、掘立柱建物跡を55基を検出しました。掘立柱建物跡の中には宗教施設とみられるものも含まれていますが、付近には樹齢900年ともいわれる「宮田の大銀杏」が所在しています。

また、中国製の白磁水注や手づくねのかわらけなど、古代末期～中世初期の遺物も出土し、謎の多い当時の様子を知る上で重要な手掛かりを提供しました。

宮田館遺跡では、縄文時代前期の捨場が発見され、多量の土器・石器が出土しました。また弥生時代から古墳時代の、北海道に主に分布する恵山式・後北式・北大式土器が出土し、平安時代の集落も検出されました。

本報告書は、平成19年度米山(2)遺跡・宮田館遺跡発掘調査の成果をまとめたものですが、これらの調査成果が、埋蔵文化財の保護と調査・研究等に広く活用されることを期待します。

最後になりましたが、発掘調査の実施から出土品の整理、調査報告書の刊行にあたって御指導御協力を賜りました関係各位に対し、厚く感謝申しあげます。

平成21年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 伊藤 博文

例　　言

- 1 本報告書は、平成19年度に発掘調査を実施した県新総合運動公園建設事業予定地内に所在する青森市米山(2)遺跡及び宮田館遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 米山(2)遺跡の所在地は、青森県青森市宮田字米山地内、青森県遺跡番号は01276、宮田館遺跡の所在地は青森県青森市宮田字玉水地内、青森県遺跡番号は01190である。
- 3 本報告書は青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆は青森県埋蔵文化財調査センター茅野文化財保護主査、岩田文化財保護主事が協議のうえ行い、個々の文責については文末に示した。依頼原稿に関しては文頭に執筆者名を記した。
- 4 発掘調査及び整理作業・報告書作成の経費は、調査を委託した青森県土整備部都市計画課が負担した。
- 5 資料の分析、鑑定、については、以下の方々に委託した（敬称略）

出土木材の年輪年代測定	独立行政法人奈良文化財研究所 光谷 拓実
出土炭化物の放射性炭素年代測定	㈱加速器分析研究所・㈱パレオ・ラボ
出土火山灰の同定分析・出土石器の石質鑑定	弘前大学 柴 正敏
出土石器の石質鑑定	青森県立郷土館 島口 天
出土木材・炭化材の樹種同定・出土植物化石の分析	東北大学 鈴木三男 古代の森研究会
出土漆器の塗膜構造分析・出土木製品の樹種同定・出土錢貨の成分分析	㈱吉田生物研究所
出土焼骨の組織学的分析	学校法人国際医療福祉大学 奈良 貴史
出土炭化種子の同定	札幌国際大学博物館 椿坂 恭代
出土未炭化種子の同定	㈱パレオ・ラボ
出土鉄関連遺物の分析	㈱岩手県文化振興事業団 岩手県立博物館 赤沼 英男
出土銅製品の分析	独立行政法人 国立文化財機構 京都国立博物館 村上 隆
採取土壤の自然科学分析（プラント・オパール・珪藻・花粉分析）	㈱古環境研究所
出土黒曜石の原産地同定分析	有限会社 遺物材料研究所
宮田館跡の縄張りについて	七戸町教育委員会 小山 彦逸
- 6 本書で利用した地形図は、国土地理院発行の5万分の1の地形図「浅虫」・「青森東部」を合成・複製したものである。
- 7 挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。なお、写真の縮尺は統一していない。
- 8 遺構・遺物の分章・挿図中での表現は、原則として次の様式・基準によった。
 - (1) 遺構内外の堆積土の注記には、『新版標準土色帖』(小山、竹原; 1994) を用いた。
 - (2) 遺物の観察表・計測値は巻末に掲載した。(3) 図版中の範囲指定等は各々説明を付した。
- 9 引用・参考文献については本文末に収めた。
- 10 発掘調査及び報告書作成における出土品・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 11 本報告書作成に際して、下記の諸氏より御協力、御助言を受けた（敬称略）

宇田川浩一、小笠原雅行、小野貴之、亀井明徳、川口 潤、木村浩一、木村淳一、工藤清泰、

小徳 晶、榎原滋高、佐々木浩一、設楽政見、白濱洋一、庄子香織、菅野美香子、鈴木和子、
瀬川 滋、関根達人、竹ヶ原亜紀、西澤正晴、羽柴直人、土生田純之、深澤百合子、藤澤良祐、
星 雅之、丸山浩二、村木 淳、八重樫忠郎、山崎忠良、山田吾郎

目 次

序

例言

第1章 調査に至る経緯と調査要項

第1節 調査に至る経緯 ······ 1 p

第2節 調査要項 ······ 3 p

第2章 調査方法と調査経過

第1節 調査方法 ······ 4 p

第2節 調査経過 ······ 5 p

第3章 遺跡周辺の環境

第1節 調査区の基本土層について ······ 7 p 第2節 周辺の遺跡 ······ 9 p

第4章 米山(2)遺跡

第1節 繩文～弥生時代の遺構および出土遺物 ······ 12 p

1、堅穴住居跡 ······ 12 p 2、土坑 ······ 16 p

3、遺構外出土遺物 ······ 18 p

第2節 古代以降の遺構および出土遺物

1、掘立柱建物跡および柱穴 ······ 26 p 2、カマド状遺構 ······ 57 p 3、井戸跡 ······ 67 p

4、土坑 ······ 91 p 5、火葬墓 ······ 106 p 6、溝跡 ······ 106 p

7、焼土遺構 ······ 109 p 8、炭化物集中遺構 ······ 110 p 9、沢跡及びその他の遺構 ······ 111 p

10、遺構外出土遺物 ······ 129 p

第5章 宮田館遺跡

第1節 繩文時代～古墳時代の遺構および出土遺物 ······ 132 p

1、土坑・溝状遺構 ······ 132 p 2、遺構外出土遺物 ······ 138 p

第2節 古代以降の遺構および出土遺物 ······ 190 p

1、建物跡 ······ 190 p 2、井戸跡 ······ 210 p 3、土坑 ······ 212 p

4、溝跡 ······ 214 p 5、柱穴 ······ 219 p 6、古錢埋納遺構 ······ 219 p

7、遺構外出土遺物 ······ 219 p

第6章 理科学的分析結果

第1節 米山(2)遺跡出土井戸枠の年輪年代 ······ 227 p

第2節 放射性炭素年代測定結果報告書 (AMS測定) ······ 230 p

第3節 米山(2)遺跡・宮田館遺跡出土木材の樹種 ······ 239 p

第4節 米山(2)遺跡遺構出土炭化材の樹種同定 ······ 245 p

第5節 青森県米山(2)遺跡出土木製品の樹種及び漆器の塗膜調査結果 ······ 249 p

第6節 炭化植物種子同定結果 ······ 259 p

第7節 米山(2)遺跡から出土した大型植物遺体 ······ 274 p

第8節 米山(2)遺跡出土資料の金属考古学的調査結果 ······ 289 p

第9節 青森市宮田館遺跡から出土した銅製品の材質 ······ 299 p

第1章 調査に至る経緯と調査要項

第1節 調査に至る経緯

○米山(2)遺跡

米山(2)遺跡は、平成7年度に実施された青森県新総合運動公園建設事業に伴う遺跡分布調査により新たに発見・登録された遺跡である。平成8・9年度には、遺跡範囲確認のための試掘調査が行われ、それによって遺跡の範囲がほぼ確定した。平成10年度（第1次調査）からは、本格的な発掘調査を開始したが、その過程で南西側に位置する山下遺跡との境界付近からも遺構・遺物が検出され、その部分を米山(2)遺跡の範囲に変更した。これらの経緯および第1次調査の成果については、平成11年度に『山下遺跡II・米山(2)遺跡』（青森県埋蔵文化財調査報告書第274集）としてすでに公刊した。平成13年度（第2次）には、水路（人工的な小川）堀削工事予定地内を調査し、平成14年度には『宮田館遺跡III・米山(2)遺跡II』（青森県埋蔵文化財調査報告書第344集）として公刊した。平成15年度（第3次）は、野球場建設予定地外縁部及び工事用取り付け道路敷設地の調査を行い、その成果は平成16年度に『米山(2)遺跡III』（青森県埋蔵文化財調査報告書第391集）として公刊した。平成16年度（第4次）・17年度（第5次）は、水路工事区域を二ヵ年に渡り発掘調査し、その成果を『米山(2)遺跡IV』（青森県埋蔵文化財調査報告書第433集）として公刊した。平成18年度には水路に隣接する園路部分の調査を行ったが（第6次）、平成19年度の調査開始時に第6次調査区が園路の路盤部分の範囲を調査しただけで、法面部分が未調査であったことが判明したため、急遽当該部分（第7次：A区）を調査し、その成果を『米山(2)遺跡V』（青森県埋蔵文化財調査報告書第456集）として公刊した（調査範囲についての経緯も第456集に詳述している）。

今回報告する内容は、平成19年度に実施した調査（第7次：B区11,100m²）についての成果をまとめたものである。平成19年度の調査（第7次）は、当初宮田館遺跡と米山(2)遺跡B区のみの予定であったが、先に示した理由から、米山(2)遺跡のA区・B区を同時進行し、A区終了後宮田館遺跡の調査を行うことになった。

○宮田館遺跡

宮田館遺跡は城館跡として登録された遺跡であり、平成5年度に範囲を拡張している（青森市1994）。県新総合運動公園の開園に伴い、隣接する県道野内環状道路の交通量増大が予想されることから、片側1車線の道路を2車線化することになった。これらの建設予定地内の埋蔵文化財包蔵地の有無について青森県土木部より青森県教育庁文化課に照会がなされた。これを受けた文化課は分布調査を青森県埋蔵文化財調査センターに依頼し、平成7年11月に分布調査を行った。その結果予定地内に上野尻・米山(1)・米山(2)・山下・玉水(2)・玉水(3)・玉水(4)の7遺跡を確認し、翌平成8年度から試掘及び本調査に着手した。また、県動物愛護センターの建設予定地における宮田館遺跡の調査結果（平成12年度：第1次）、宮田館遺跡から玉水(2)遺跡へ遺構が連続して発見されたことから、平成14年3月29日付で玉水(2)遺跡を宮田館遺跡へ統合した。県道拡幅部分に関しては、『宮田館遺跡』（青森県埋蔵文化財調査報告書第322集）・『宮田館遺跡II・三木本遺跡』（青森県埋蔵文化財調査報告書第340集）・『宮田館遺跡IV』（青森県埋蔵文化財調査報告書第365集）として既に公刊している。県動物愛護センター建設予定地部分については、『宮田館遺跡V』（青森県埋蔵文化財調査報告書第411集）・『宮

田館遺跡VI』(青森県埋蔵文化財調査報告書第429集)として公刊されている。また、個人住宅建設にかかる調査が平成15年・16年度に青森市教委により行われ、報告書が公刊されている(青森市2002・2003)。県新総合運動公園建設予定地内については、『宮田館遺跡III・米山(2)遺跡II』(青森県埋蔵文化財調査報告書第344集)として公刊されている。したがって今回報告する平成19年度の調査が第8次の調査となる。

平成19年度の調査は、園内の外周道路敷設予定箇所に遺跡範囲がかかっていたことから調査することとなった。調査は4月23日から開始したが、米山(2)遺跡の調査範囲変更に伴い、5月上旬から調査を一時中断し、米山(2)遺跡A区の調査を先に行い、終了後(7月上旬)に再開することとなった。当初2,550m²の予定であったが、第3次調査結果から、遺跡範囲が北側に広がることが明白であったことから、調査範囲を広げた結果、4,100m²の調査を行った。(茅野)

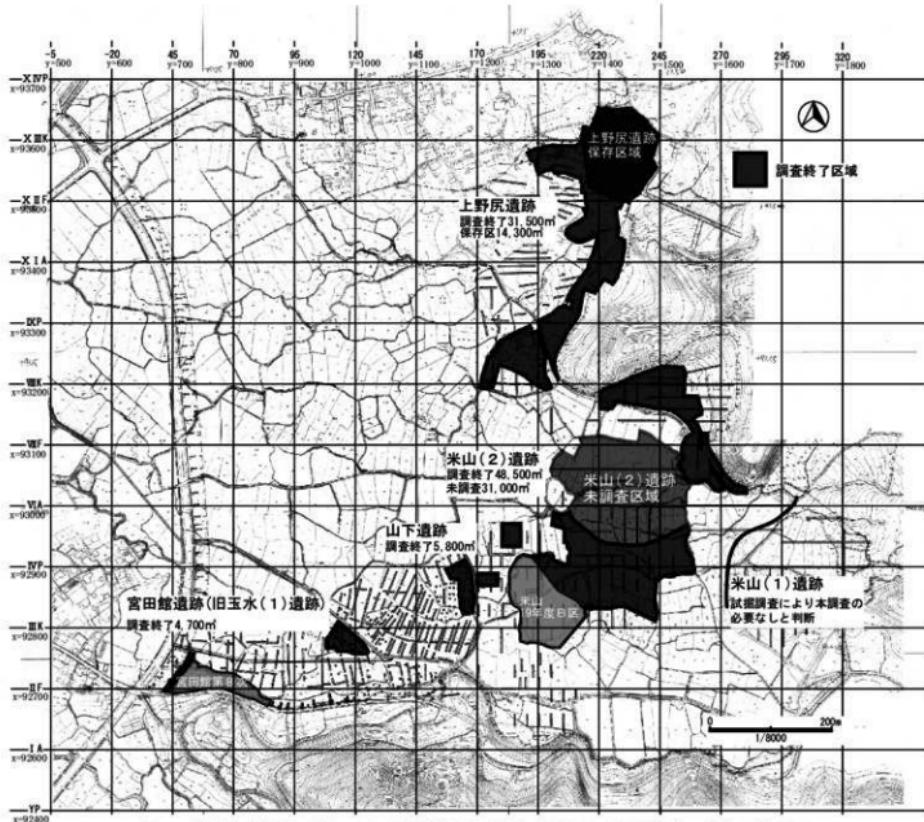


図1 県新総合運動公園内における埋蔵文化財調査状況図及び今回報告の調査区位置図

第2節 調査要項

1 調査目的

県新総合運動公園建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する米山(2)遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。

2 発掘調査期間 平成19年4月23日～同年11月9日

3 遺跡名及び所在地 米山(2)遺跡（青森県遺跡番号01276） 青森市大字宮田字米山地内 宮田館遺跡（青森県遺跡番号01190） 青森市大字宮田字玉水地内

4 調査面積 米山(2)遺跡 11, 100m² 宮田館遺跡 4, 100m²

5 調査委託者 青森県国土整備部都市計画課

6 調査受託者 青森県教育委員会

7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査体制

調査指導員 村越 潔 国立大学法人 弘前大学名誉教授（考古学）

調査員 葛西 勲 前青森短期大学教授（考古学）

〃 山口義伸 青森県立浪岡高等学校教諭（地質学）

〃 高島正佑 前八戸工業大学教授（建築史）

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 末永 五郎

次長（調査第一G L兼務）三宅 徹也

總務G L 櫻庭 孝雄

總括主幹 大湯 卓二

文化財保護主査 茅野 嘉雄

〃 小山 浩平

文化財保護主事 岩田 安之

調査補助員 一戸佐知絵 高谷 景子 林 啓太

高坂 真澄 奈良亜矢子 山下 生詩

最上 法型



米山(2)遺跡南端部における作業状況

第2章 調査方法と調査経過

第1節 調査方法

1 グリッドの設定

両遺跡の位置する青森市宮田地区では、第1章で述べたとおり広大な範囲内において多くの遺跡の調査が行われている。平成8年度に行われた県新総合運動公園建設予定地内の遺跡範囲確認調査では、予定地内に所在する遺跡を全てカバーするようなグリッド設定を、公共座標軸に合わせて行った。グリッドの呼称については、報告書の誤記による呼称のずれがあることは第391集で指摘されているため、今回、米山(2)遺跡については山下・上野尻系グリッド呼称を、宮田館遺跡に関しては、宮田館系グリッド呼称を、それぞれ用いることとした。米山(2)遺跡のグリッドの呼称は、旧日本測地系における平面直角座標第X系のX=92680.0000・Y=640.0000を「II A-30」とし、座標X軸にはローマ数字（I～）とアルファベット（A～T）の組み合わせを用い、Y軸には算用数字を付している。宮田館遺跡のグリッド呼称は、旧日本測地系における平面直角座標第X系のX=92680.0000・Y=644.0000を「II A-30」とし、座標X軸にはローマ数字（I～）とアルファベット（A～T）の組み合わせを用い、Y軸には算用数字を付している。両遺跡ともにグリッドは4m単位とし、X軸は4m北進する毎に「I A」「I B」…とアルファベットが進み、「I T」に達すると、次はローマ数字が繰り上がり「II A」となる。Y軸は4m東進する毎に算用数字が1ずつ増える。グリッドの呼称は南西隅のグリッドライン交点を用いて表している。

今回の調査では、本遺跡の北東に位置する新総合運動公園建設予定地内に設置されている、「新総合運動公園測量基準点」Ⅲ級（3-No.6、3-No.8）を基点とし、4級基準点の設置及びBM測量を業者（株式会社コンテック東日本）に委託した。

2 調査方法

調査の開始にあたっては、平成8・9年度に実施した試掘調査トレーニング壁面の土層観察により、土壤の層位的な堆積状況と遺物の包含状況を把握した後、スコップやショレン、移植ペラ等を用いて層位毎に掘り下げていった。今回の調査区は平成7年まで水田及び畑地として利用されていたため、耕作土と赤橙色を帯びた水田床土層上面までは、多くの箇所でバックホーによる表土除去を行った。基本土層の名称は、表土から下位に順にローマ数字を付した。包含層から出土した遺物の取り上げは、基本的にグリッド・層単位を行い、必要に応じて写真撮影と出土平面図作成、標高の測定を行い、番号を付した。遺構の調査は、規模や形態、付属施設等の有無に応じて適宜セクションベルトを設定し、土層を観察しながら精査を進めた。土層の名称は基本的に上位から下位に算用数字を各々付すこととした。遺構の平面図作成及び遺構内出土遺物の出土地点や出土状態の図化に関しては、簡易的な遺方測量と遺構実測支援システム（遺構くんVer. 5.976）を用いて行った。縮尺は20分の1を基本としたが、種類や規模の大小により10分の1、40分の1等とした。

3 遺構の名称

調査段階での遺構番号は、米山(2)遺跡では種別毎・検出順に平成16年度調査時からの連番になるようにした。また、宮田館遺跡では種別毎・検出順に1からはじめた。ちなみに今回の調査で用いた番号について表1に示した。調査時における遺構の略称は以下の通りであるが、本書においては観察

表でのみこれら略称を使用し、本文中においては正式な呼称を用いている。

SC：炭化物集中遺構 SD：溝跡 SE：井戸跡 SF：カマド状遺構 SI：竪穴住居跡・竪穴遺構
SK：土坑 SN：焼土遺構 SP：柱穴様ピット SU：水路跡 SW：溜池状遺構 SX：性格不明遺構

表1 遺構番号表

米山(2)遺跡

SC	SD	SE	SF	SI	SK	SN	SP	SW	SX
12~21	108~125	90~123	120~170	33~35	207~333	17~18	2000~4762	1~2	2

宮田館遺跡

SD	SI	SK	SN	SP	SV	検場	SX
1~9	1~7	1~18	1~	1~103	1~3	1	1

4 写真撮影

35ミリのモノクローム・カラーリバーサル（ISO100）の2種類のフィルムとデジタルカメラを主に使用し、必要に応じて6×7版（ISO100）、4×5版（ISO100）を併用した。

撮影にあたっては、主に土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の検出状況を記録し、必要に応じて作業状況等の記録にも努めた。また、ラジコンヘリ・高所作業車による俯瞰撮影も行った。

第2節 調査の経過

○米山(2)遺跡（B区）

4月23日：調査開始、機材を搬入し、環境整備を行う。

5月上旬～中旬：調査区内に測量基準の杭を打設する。また、重機による表土除去も行い、遺構確認を中心に行進した。

6月上旬：調査区北東区域の表土除去と遺構確認をほぼ終了し、井戸跡やカマド状遺構が検出される始める。また、小ピットも多数検出され、掘立柱建物跡として組めるものも発見された。

6月下旬：調査区北側で井戸跡の精査が進む。SE96からは漆器の椀が2点出土した。また、井戸枠が良好に残存しているものが多数発見された。

7月上旬：調査区南東区域の精査に入る。少雨と砂利主体の地山に悩まされ作業の進行が遅滞するが、遺構の密度が希薄であったため、この区域の精査は7月末ほぼ終了した。

8月上旬：調査区北東区域の精査も最終段階に差し掛かる。この時点で小ピットの数が1,000を超える。8月1日にはラジコンヘリによる空中撮影を行った。

8月下旬：調査員の高島成侑氏から、掘立柱建物跡についてのご指導をいただき検討を行った。その結果、SB01やSB07などの規模の大きな建物跡が発見された。

9月上旬：調査区西半分の表土除去に着手。カマド状遺構、井戸跡、小ピットなどが多数検出されたため、職員1名・補助員1名の応援を要請。作業員も若干名補充し、体制を整備し精査を継続した。また、発掘調査期間を11月9日までの2週間延長することを決定した。

9月下旬：SK295から白磁水注が出土。また、沢3周辺から手づくねかわらけが出土し、これまで想定していなかった12世紀後半～13世紀初頭の遺物・遺構が存在することが明らかになる。

10月上旬：天候にも恵まれ、精査が進む。沢3からは溜池状の遺構（SW01）が発見され、鳥形の形代や火鉢臼などの木製品がまとめて出土した。

10月下旬：10月25日にはラジコンヘリによる2回目の空中撮影を行った。また、10月31日には高島成侑氏による2回目の現地指導を行い、SB26を確認した。

11月上旬：11月3日には現地説明会を行い、約100人の参加があった。精査も順調に進み、11月9日に今年度の全作業を無事終了した。(茅野)



現地説明会の様子（SB26付近において）

○宮田館遺跡

4月23日：プレハブ、仮設トイレを設置し、環境整備を行なながら人力掘削で作業を開始する。

5月15日：急遽米山(2)遺跡A区の調査を行う必要が生じたため宮田館遺跡の調査を中断する。

7月3日：米山(2)遺跡A区の調査が終了したため、宮田館遺跡の調査を再開する。

7月上旬：重機を使用し、表土の除去を行う。その結果、平安時代の堅穴住居跡などを確認し精査を開始した。また縄文土器・石器を中心とした捨て場1も確認され、円筒下層c式を中心とした土器破片が集中した状態で発見された。

7月下旬：北宋銭を中心とした古銭が約30枚集中して発見された。7月25日には調査員山口義伸氏から、宮田館遺跡における地質などご指導をいただいた。

8月下旬：捨て場1の近代以降の水田によって攪乱された上層から、龍泉窯青磁、近世の染付が出土する。8月30日には調査員柴正敏氏から、地質に関するご指導をいただくとともに遺構外に堆積した火山灰を採取していただいた。

9月上旬：台風による強風、大雨の影響で、作業がたびたび中断した。9月18日には調査区に南接する現道の路肩が崩落した。丘陵側から地下水脈を通って調査区内に入る水量が増加し地盤が緩んだことが原因と思われる。崩落部分を土囊で養生するなどの応急処置を行い、後に事業者が業者に依頼し修復した。

9月下旬：9月25日には調査員の工藤雅樹氏が来訪された。9月27日には調査区の遺構の状況がほぼ明らかになったことに伴いラジコンヘリによる空中写真撮影が行われた。

10月上旬：平安時代～中世の遺構の精査がほぼ終了した。しかし9月下旬から本格的に精査を開始した捨て場1の遺物量が予想以上に多かったことと、山手からの湧水が止まらず捨て場部分が常にプール状態になってしまったため、遺物の取り上げに手間取った。水中ポンプを常時3台稼働させて対応した。そのような状況ではあったが、10月19日に捨て場1の遺物取り上げを含んだすべての調査を完了し、宮田館遺跡の調査を終了した。（岩田）



捨て場1の作業状況



大雨による調査区の水没状況

第3章 遺跡周辺の環境

第1節 調査区の基本土層について

1. 米山(2)遺跡・宮田館遺跡周辺の地形 (図2)

本遺跡周辺の地形・地質については、第433集・第456集などで述べられているので今回あえて詳述しない。ここでは地形区分図と第4系の土層断面模式図を掲載しておく。

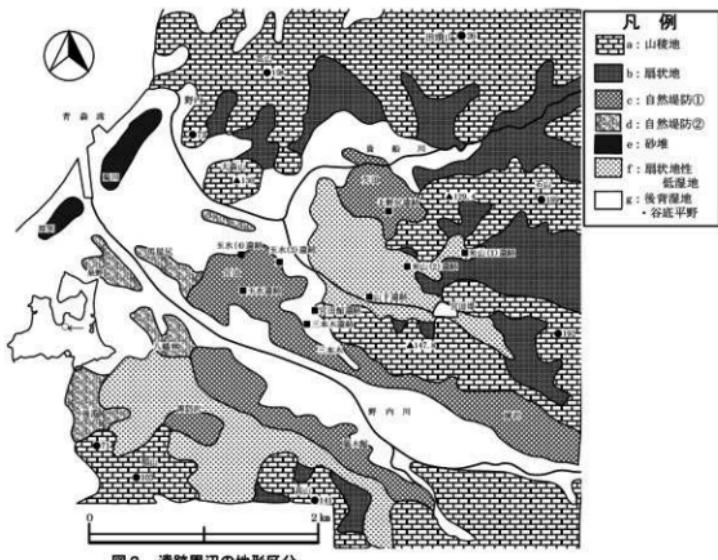


図2 遺跡周辺の地形区分

調査区内の基本的な土層説明

米山(2)遺跡の基本土層について

今回報告する調査区については、基本的に前年までの調査区と同様の土層堆積状況であったため、あえて土層断面図を作成しなかった。遺跡内の基本的な土層については、第433集を踏襲している。簡略に記述するならば以下のとおりになる。



図3 米山(2)遺跡周辺に分布する第四系の模式断面図と遺跡の位置
(上村 (1983) の第20図を改変した)

I層は表土である。見かけにより以下の二層に分層される。I a層：現代の水田耕作土。I b層：現代水田の床土（酸化鉄の凝集層）。

II層は縄文時代中期から中・近世までの土層を含む。白頭山一苦小牧火山灰が本層を2分する鍵層となっている。II a層：シルト質の黒褐色土層、白頭山火山灰よりも上位の土層であり、古代以降に堆積した土層である。II b層：白頭山火山灰よりも下位の層であり、縄文時代中期～古代までに堆積

した土層である。やや砂質の黒色シルト質土であり、場所により礫を多く含む場合もある。

III層は多くの構造が掘削される、ある時点（縄文時代中期後半以降の可能性が高い）での地山層である。場所により礫・砂質土・シルト質土がその割合を複雑に変えながら調査区に現れている。今回の調査区内においては、南東側において礫と砂が濃集している部分が見られたが、全体的に砂とシルトを主体とするものであった。III層は本来細かく細分されるべきであろうが、ここでは縄文時代前期あたり？～中期前半くらいの時期の可能性を指摘しておく。

IV層は調査区内では確認されなかつたが、第6次調査の際に近隣の工事現場の切通しにおいて確認できた。酸化して褐色を帯び、未淘汰で大振りの礫層を主体とする層で、第456集の第5章第10節における層序区分のA層に相当する。本層の年代はV層の年代が縄文時代草創期以前であるため、縄文草創期以降である。

V層はA層の直下で検出された火山灰を含む層（B層）である。火山灰は十和田一八戸テフラ起源であると推定されている。Bu・Bm・B1層に細分され、Bu・Bm層から木材化石が検出された。ちなみにBm層上位から採取された木材化石（トウヒ属）の放射性炭素年代測定値は 13480 ± 70 yrBP (1σ : 14260-13860calBP) である。

VI層はC層に対比され、礫と砂で構成される層中に木材化石が検出された。（茅野）

宮田館の基本土層について

今回の調査区での基本層序は第3号溝跡を含んだ約17mの南北ベルトで設定した。前回の調査において設定された基本層序とは数字は対応していないが、今回の漸移層とした第IV層は『第411集 宮田館遺跡V』の第VI層、今回第V層とした千曳浮石層に相当するローム層は第VII層に相当する。第IV層より上層の細分方法が異なるということである。

本遺跡で主にII層の黒色土中に筋状に確認された砂層について調査員の柴氏、山口氏の両氏から以下の見解を御教示いただいた。砂層が形成された原因として、地震などによる強い揺れによって黒色土にクラックが生じ、下層の黄褐色土層（第IV層以下）に含まれる砂が地下水と一緒に地下水位の高い時にクラック内に上昇した現象の痕跡と推定される。また下からだけではなく標高が高くなるにしたがい黒色土層が薄くなり黄褐色土層が存在する箇所からは、横方向に入るクラックへ水平状態に砂が流れ込んだ状況も見て取れる。また第2号建物跡の床面近くに砂が水平に堆積している現象は、住居廃棄後に堆積土と床面の間に生じた隙間に横から水と一緒に砂が入り込んだと推測される。

I a層 黒色土（10YR2/1）が主体である。表土を重機で剥いだ下の層であり、おそらく近現代に属する水田に使用された土である。乾くと固くしまる。

I b層 黒色土（10YR1.7/1）が主体である。第I a層と同様、近現代に使用された水田土と推測されるが、第I a層に比して本層の方が黒みが強く、水分量を多く含む。

I c層 黒色土（10YR2/1）に浅黄橙色ローム粒（10YR8/4）（ ϕ 1～3mm）が10%混じる。近世に属すると推測される。

II a層 黒色土（10YR2/1）に黄橙ローム粒（10YR5/6）（ ϕ 1～10mm）浅黄橙色火山灰ブロック（10YR8/3）（ ϕ 5～20mm）が混じる。上層に比して茶色みが強い。中世～近世に属すると推測される。本層から一括出土錢が発見された。

II b層 黒色土主体（10YR2/1）ににぶい黄褐色土（10YR4/3）15%混じる。古代に属すると推測される。

- II c 層 黒色土 (10YR2/1) に明黄褐色ロームブロック (10YR7/8) ($\phi 5\text{ mm}$) が混じる。プライマリーナー堆積ではないが明黄褐色 (10YR6/6) 白頭山一苦小牧火山灰 (B-Tm) と思われるブロックが40%混じる。古代に属すると推測される。
- III層は以下のように細分できたのは第3号構跡を挟んで北部分だけで、南部分はIII層の細分はできなかった。よって、南部分に関しては第III層とのみ記し、北部分は細分層位で記録を行った。
- III層 黒色土 (10YR1.7/1) に火山灰起源と推測される褐色土 (10YR4/6) が5%混じる。
- III a 層 黒色土 (10YR2/1) に 浅黄橙色土 (10YR8/3) が混じる。縄文～古代に属すると推測される。
- III b 層 黒色土 (10YR2/1) に暗褐色土 (10YR3/4) 30%黄橙色粘土ブロック (10YR7/6) ($\phi 3\text{ mm}$) 2%黄褐色ローム (10YR6/8) ($\phi 1 \sim 5\text{ mm}$) 1%が混じる。植物質起源と推測される固結した鉄分が多く確認された。縄文～古代に属する層と推測される。
- III c 層 黒色土 (10YR2/1) に 明赤褐色 (5YR3/8) の植物起源と思われる鉄分が混じる。縄文～古代に属すると推測される。
- IV層 にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/3) に黄褐色土 (10YR4/6) が10%混じる。第III層と第V層の漸移層である。
- V層 千曳浮石相当層

第2節 周辺の遺跡

米山(2)遺跡・宮田館遺跡は、青森市東部の宮田地区に所在する。青森市宮田地区は青森中心市街地より東へ約8kmに位置し、名湯浅虫温泉は遺跡の北東約6kmに位置する。現在は国道4号バイパスが遺跡の東側約1kmを東西に走っているが、バイパス開通以前、国道4号は久栗坂～野内・造道を経て現青森県庁まで至り、野内からは遺跡の目の前を通り青森市高田へ至る野内環状道路が現在も走っている。この野内環状道路は、青森平野南部の丘陵を縫うように走っており、その沿線には縄文時代～中世にかけての遺跡や城館跡が多数存在しており、古くから重要な交通路として利用されていたと考えられる。また、浅虫方面は海に山が迫っており、交通の難所でもある。その難所を越えて青森平野に入る際最初に通過するのが久栗坂・野内・宮田などの集落である。いわば青森平野の東の玄関に宮田地区は位置している。以下には時代を追って周辺の主な遺跡を紹介する。

縄文時代の遺跡

縄文時代早期 宮田館遺跡（県429集）などで寺の沢式・中野式・物見台式土器などが出土しているが、遺構は発見されていない。

縄文時代前期 縄文時代前期初頭の長七谷地Ⅲ群土器に類似する土器が宮田館遺跡から出土した（県314集）。野内川左岸の稻山遺跡では、前期中葉～末葉（円筒下層b～d 2式）にかけてのやや規模の大きい集落が発見されている（青森市56・62・66・71集等）。上野尻遺跡や宮田館遺跡でもほぼ同時期の小規模な集落が発見されている（県353集・429集）。

縄文時代中期 中期後半の最花式～大木10式に併行する土器群を伴う小規模な集落が宮田館遺跡や米山(2)遺跡で発見されている（県429・391・433集など）。

縄文時代後期 後期初頭の牛ヶ沢式・螢沢式土器などが散発的に出土している（県391集等）。後期前葉の十腰内I式土器は、宮田地区のほぼ全域から出土しているが、土坑（県302・391集）や甕棺墓

(県433集)が少量発見されたのみで、堅穴住居跡は発見されていない。また、先述の稻山遺跡では多数の土坑と共に環状列石や甕棺墓が、本遺跡北西に位置する山野岡遺跡では石棺墓が発見されている(青森市1983)。後期中葉～後葉にかけては、時期が下るにつれて遺物量・遺構数共に増加している。特に十腰内V式段階では、米山(2)等で遺跡數棟単位でまとまる堅穴住居群が数箇所、上野尻遺跡では環状にめぐる掘立柱建物跡群なども発見され、この時期の集落構成の一端を探る上で貴重な資料を提供している。環状掘立柱建物跡群については、数世代にわたる居住施設という考え方や(水嶋豊2007)、祭祀遺構であるという考え方(谷口康博2005)が出されており、今後の検討により集落の性格および宮田地区の該期の状況が明らかになっていくものと思われる。

縄文時代晚期 長森遺跡からは縄文時代晚期初頭の土器群と土坑が多数発見された(青森市1985)。

米山(2)遺跡からは、縄文時代晚期後葉の土坑墓と考えられる土坑が発見されている(県391集)。

また、大浦貝塚からは縄文時代晚期の製塙土器や骨角器が発見されている(青森市1971)。

縄文時代晚期から弥生時代前期 上野尻遺跡や米山(2)遺跡から大洞A'式や砂沢式土器が出土しているが、遺構は発見されていない(県302・391集など)。

弥生・古墳(続縄文)時代 天王山式や赤穴式土器が、宮田館遺跡や米山(2)遺跡で散発的に出土している(県322・429・391集)、また、今回の調査で恵山式・後北C:D式・北大I式が出土した。北海道に主に分布する土器型式が時間的に連続して出土したことは、当時における当地区を考える上で重要なである。

平安時代 10世紀中葉(B-Tm火山灰降下以降)～11世紀代にかけて、宮田館遺跡や山下遺跡でやや大きな集落が営まれる。県動物愛護センター建設地の調査では、30点もの鉄製品が一括埋納されていた土坑や、集落を囲む溝跡などが発見されている(県411集)。また、遺跡の所在する尾根上には、古代防御性集落が存在していた可能性が地表面観察から想定される。

鎌倉～室町時代 中世前期の遺構・遺物は米山(2)遺跡と宮田館遺跡から発見されている。米山(2)遺跡では今回の調査で中国産白磁水注や手づくねかわらけなど12世紀後半～13世紀前半の遺物と、掘立柱建物跡を主体とする同時期の可能性がある遺構群が発見された。二面や四面の庇を持つ規模の大きい建物跡が複数発見された。宮田館遺跡では珠洲I期の甕破片が出土している。また、北約5kmに位置する多字耕館遺跡(多字末井館ともいう)は、文治5年(1189年)の奥州合戦の残党である大河兼任が立てこもったとされる城館である。野内環状道路沿いには、宮田館・後泡遺跡(後泡蝦夷館)・戸崎館遺跡など、古代防御性集落の系譜上にあると考えられる館跡が存在する(青森市史編集委員会2005)。いずれも山稜の頂部付近に溝又は土塁をめぐらせた簡素な構造が多い。城館以外では、多数のカマド状遺構や井戸跡などが米山(2)遺跡・山下遺跡などから発見されている(県258・274・344・433集)。また、延文2年(1357年)に造立されたとされる、現在念心寺に所在する板碑、宮田の大いちょう(樹齢900年ともいわれる)、宮田山寺跡(かつて五輪塔の火輪が存在していた)などの信仰施設が宮田館南裾周辺に集まっている(佐藤仁2006)、当時の館跡・信仰施設・生産および日常生活空間との関連を考えるうえで重要な情報を提供している。(茅野嘉雄)



図4 周辺の主な遺跡

第4章 米山(2)遺跡

第1節 繩文～弥生時代の遺構および出土遺物

1、堅穴住居跡

縄文時代の遺構は堅穴住居跡3軒・土坑4基である。また、調査区内には縄文時代～弥生時代の遺物を包含する沢跡が3箇所発見されたが、これらの出土遺物については、遺構外出土遺物の項で扱うこととする。

第33号堅穴住居跡(SI-33)(図5)

【位置・確認】B区中央やや北、IVL-188グリッドに位置する。おおむね第III層上面で確認した。遺構の上面は現代の水田により削平されている。【重複】なし。【規模・形状】平面形は直径3mの円形を呈する。【堆積土】暗褐色シルト質土を主体とする。堆積土の母材は第III層と第II b層の混合土であると考えられる。床面上付近には黒色土の広がりが見られたため、土壤サンプルを採取し、フローテーション法により水洗し選別を行った。その結果9粒のヒエ属炭化種実を検出することがで

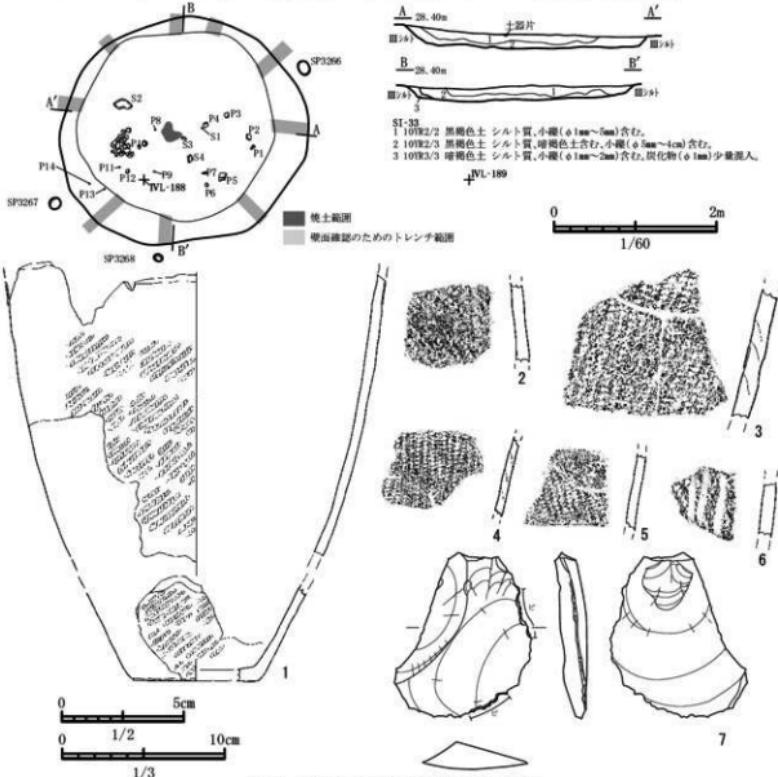


図5 第33号堅穴住居跡及び出土遺物

きた。[壁・床面] 第III層を掘り込み、床面としている。壁は床面から緩やかに立ち上がっている。残りの良い部分で床面より25cmほどが残存している。[炉] 床面中央部付近で、床面よりやや浮いた状態で焼土を確認したが、炉である可能性は低いため炉は確認できなかった。[柱穴] 遺構内の床面には柱穴は確認できなかったが、遺構確認時には住居プランの外側を巡るように小ピットのプランを確認した。しかし、精査の結果柱穴と判断できたものは3基のみであったため、住居跡に関連するかどうかは不明である。[施設] 発見されなかった。[出土遺物] 主に堆積土1層中から縄文時代中期後半～末葉の土器が出土している(1～6)。LRやRLが横位または斜位に回転施文されており、6には3本1組の幅広沈線が縦方向に施文されている。これらの土器の接合痕は明瞭に外傾している。7は使用に伴う微細剥離がみられる剥片である。(茅野)

第34号堅穴住居跡(SI-34)(図6)

[位置・確認] B区南端、III-G-192グリッドに位置する。第III層上面で炉跡のプランのみを確認した。遺構の上面は現代の水田により削平されている。[重複] なし。[規模・形状・堆積土] 住居跡の全体形は不明である。炉跡の平面形は梢円形を呈する。火床面の位置と確認状況から、新旧2時期の炉跡が重複しているとみられる。

新規炉跡(炉A)：石囲部と南側にのびる浅い土坑状の張り出しから構成される。長軸1.6m、短軸0.68mを測り、確認面からの深さは約10cmである。炉跡に使用された礫は炉内側ほど強く被熱し赤変している。礫は炉全体の掘方の壁際に据えられているよう、特別構造の掘方を据削して据えたものではない。石囲部の北側には棒状の礫が炉の長軸に直行するように出土した。この礫も新規炉跡に関連する可能性がある。新規炉跡には黒色～黒褐色主体の土層が堆積している。特に下位の3層には炭化物や炭化材がやや多く含まれていた。火床面直上から検出した炭化材の樹種はクリ、放射性炭素年代測定値は 3997 ± 35 yrBPである。

古期炉跡(炉B)：炉Aの北側に位置する。確認面には炉Bに関連すると考えられる礫が横たわっているため本炉跡が古い可能性がある。堆積土は2層に分層され、底面から北側壁面にかけて焼土が確認された。この部分が火床面と考えられる。[出土遺物] 堆積土中から縄文時代中期と思われる土器

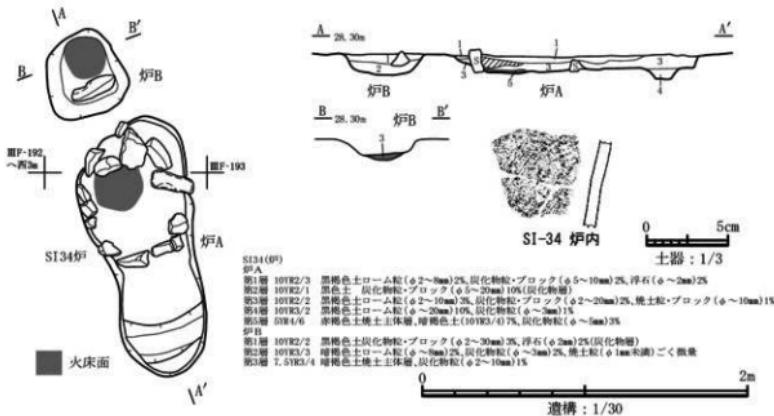


図6 第34号堅穴住居及び出土遺物

片が出土している(1)。(小山・茅野)

第35号竪穴住居跡 (SI-35)(図7)

【位置・確認】B区南端、III-F-191グリッドに位置する。第III層上面で確認した。遺構の上面は現代の水田により削平されている。【重複】中世以降の小ピットと重複している。これらの位置については図中にS P番号を付している。【規模・形状】炉跡の新旧関係から新旧2時期が存在する。最終的な平面形は長軸5.25m・短軸3.6mの楕円形を呈する。古期の正確なプランは不明である。【堆積土】堆積土の観察からは新古2時期の重複状況はつかめなかった。暗褐色シルト質土を主体とする。

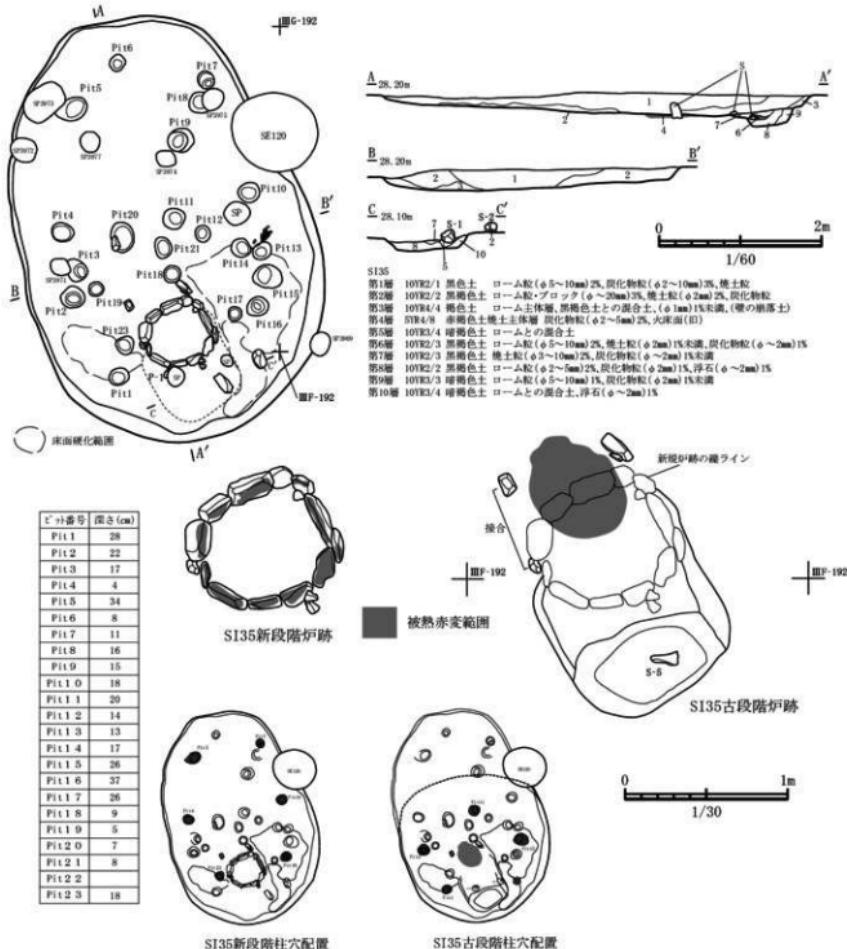


図7 第35号竪穴住居跡

堆積土の一部をフローテーション法により水洗し選別を行った。その結果1層から炭化ヒエが2粒検出された（第6章第6節参照）。【壁・床面】第III層を掘り込み、床面としている。壁は床面から緩やかに立ち上がっている。残りの良い部分で床面より20cmほどが残存している。床面は北から南側に若干傾斜している。炉跡周辺の床面に明瞭な硬化面がみられた。【炉・施設】新段階：床面南端の長軸ライン上で石囲炉を確認した。石囲炉は円形に近い形状で礫が組まれている。礫の炉内面側は赤変し、強く被熱した状況が伺える。しかし、炉石の被熱状況に比して、炉底面は被熱しておらず明瞭

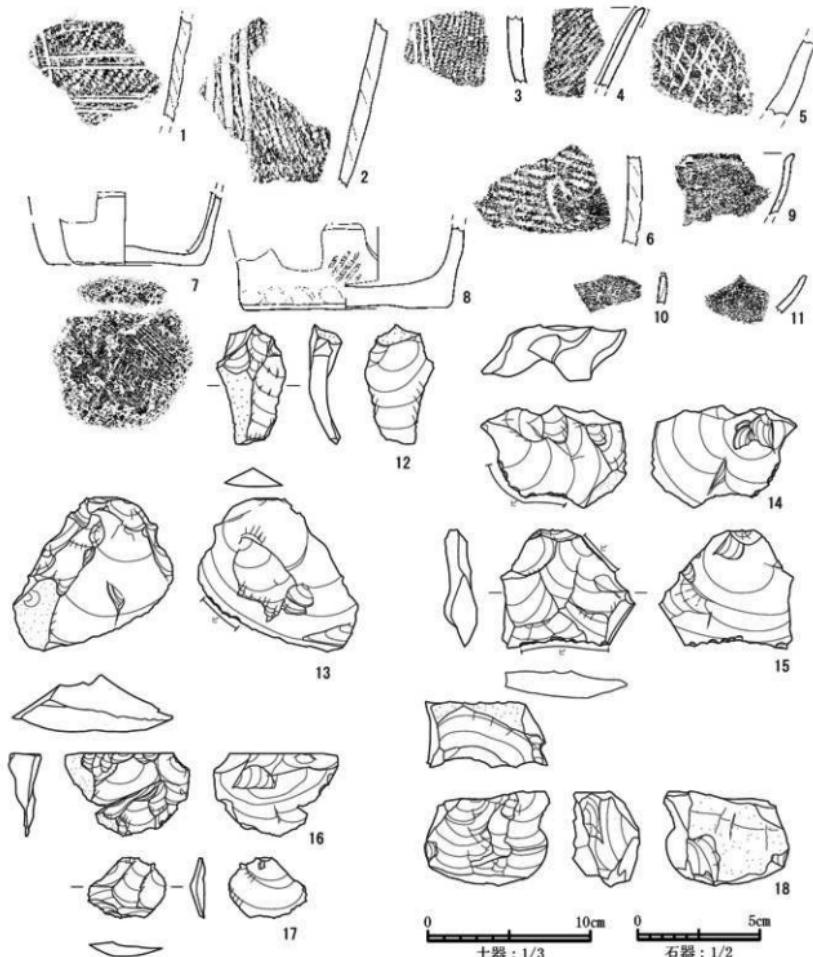


図8 第35号竪穴住居跡出土遺物

な火床面は検出できなかった。この状況から炉内にたまつた灰等を搔き出しながら使用していたことも想定される。石囲炉の南東側で壁際に近い位置に礫を平行に配置した施設が検出された。床面の項でも述べたが、炉跡周辺及び平行に配置された礫の周辺床面は非常に硬化しており、床面の状況と位置から出入り口に関連する施設であると考えられる。平川市(旧平賀町)井沢遺跡や米山(2)遺跡第3次調査区(SI1001)に類例が見られる。古段階：床面精査時に新段階の石囲炉の北側に平行に張り出した礫(図7中古期炉跡S-1、S-3)を検出した。精査時は新規炉跡の一部として認識していたが、その後、新規炉跡の範囲外に延びている焼面を検出したことと、新段階の出入り口施設に使用された礫の下から、いわゆる複式炉系列の炉の前底部に相当する施設が検出されたことから、炉が2段階あることが確認された。S-1、S-3は焼面を囲うように配置されていたことから、この焼面は火床面で、S-1、S-3は炉石であったと考えられる。火床面の規模は長さ70cm、幅50cmで4cmほどの厚さで被熱している。火床面の軸線上には幅1m、深さ5cm程の掘り込みがあり、前底部に相当するものと考えられる。前底部の端部には長さ80cm、幅50cm、深さ10cm程度の楕円形の落ち込みが検出された。古段階炉跡火床面からは炭化材が採取され、樹種はクリ、放射性炭素年代測定値は 4110 ± 30 yrBPであった(第6章第2節参照)。【柱穴】床面から本遺構に伴うと考えられる小ピットを23基発見した。図7に新旧の変遷図を示した。古段階は円形プランに主柱穴が5角形に配置され、新段階は長楕円形プランに主柱穴が6本長方形に配置されたものと考えられる。【出土遺物】主に堆積土1層中から縄文時代中期後半～後期初頭の土器(1～11)や石器(12～18)が出土している。1は円筒上層e式、2・3は榎林式、6は大木10式並行期の土器、9～11は後期後半の土器と考えられる。7の底面には笛葉压痕が、8の底部付近には指頭圧痕が見られる。また、9～11は磨滅が特に激しい。石器は20点出土したが定型的なツールは皆無であり、剥片・残核などが目立つ。剥片の中には13～15のように使用に伴うと考えられる微細剥離痕が見られるものがある。これらの遺物はそのほとんどが堆積土からの出土であり、本来的に本住居跡に伴う可能性は少ないと考えられる。【小結】時期を決定づけるような遺物出土状態は確認できなかったため、詳細な年代は不明である。しかし、古段階の炉石と考えられるS-1と新段階の炉石に組み込まれていたS-2が接合したことから(図7)、古段階の炉と新段階の炉は時間の間隔がなく作り替えられた可能性が考えられる。つまり、複式炉系列の炉から、石囲炉で出入り口に礫が平行に配置される出入り口を持つ住居形態に時間差が無く建て替えられた可能性が考えられる。(小山・茅野)

2、土坑

第216号土坑 (SK216)(図9)

【位置・確認・重複】B区中央東端、IVE-206グリッドに位置する。第III層上面で確認した。【規模・形状】開口部1.4×1.1m、底面0.95m×0.75mの不整な円形を呈する。確認面からの深さは0.65mである。【壁・底面】底面はほぼ平坦であり、壁は垂直かややオーバーハングしながら立ち上がり、開口部付近では崩落の影響か強く外反している。【堆積土】II b層主体の黒色土が自然堆積している。堆積土中にはIII層(シルト)の細かい粒子が混在する。【出土遺物】堆積土中から剥片が1点出土した。裏面に原礫面を残している。(茅野)

第239号土坑 (SK239)(図9)

【位置・確認・重複】B区中央西側、IVI-191グリッドに位置する。第III層上面で確認した。【規模・形状】直径ほぼ1mの円形を呈する。確認面からの深さは0.8mである。【壁・底面】底面は皿状にくぼんでおり、壁はオーバーハングしながら立ち上がる。【堆積土】II b層主体の黒褐色土が自然堆積している。【出土遺物】なし。(茅野)

第246号土坑 (SK246)(図9)

【位置・確認・重複】B区中央西側、IVI-191グリッドに位置する。第III層上面で確認した。【規模・形状】直径ほぼ1mの円形を呈する。確認面からの深さは0.8mである。【壁・底面】底面は皿状にくぼんでおり、壁は弱くオーバーハングしながら立ち上がる。【堆積土】II b層主体の黒褐色土が自然堆積している。【出土遺物】なし。(茅野)

第247号土坑 (SK247)(図9)

【位置・確認・重複】B区中央西側、IVJ-191グリッドに位置する。第III層上面で確認した。【規模・形状】直径ほぼ1.1mの円形を呈する。確認面からの深さは0.7mである。【壁・底面】底面は皿状にくぼんでおり、壁は垂直およびオーバーハングして立ち上がる。【堆積土】II b層主体の黒褐色土が自然堆積している。【出土遺物】底面から礫が出土したが自然礫であった。(茅野)

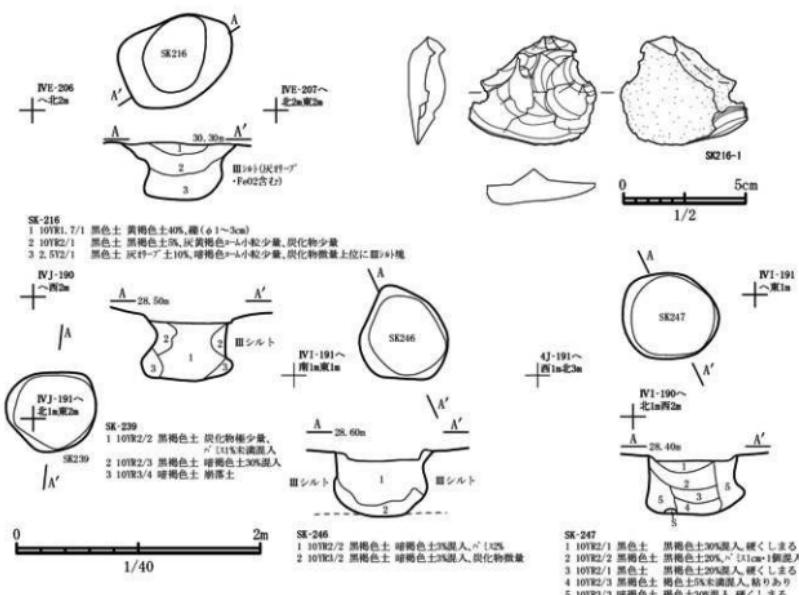


図9 縄文時代の土坑 (SK216・239・246・247)

3、遺構外出土遺物

B区の遺構外からは20箇の遺物が出土した。B区はほぼ全面に近代以降の水田跡の削平を受けていることから、出土遺物の大半は4箇所の沢跡からの出土である。各沢については、第2節で詳述するが、縄文時代の出土遺物についてまとめておく。

沢1：沢1は最底面付近に白頭山一苦小牧火山灰が堆積しているため、縄文時代の遺物はあまり出土しなかった。

沢2・4：沢2と4については、調査段階で別の番号を付したが、結果的には同一の沢の可能性が高い。遺物は沢2から34のような弥生前～中期の土器が出土し、沢4からは縄文時代中期後半（榎林・最花式）の土器がやまとまって出土している。

沢3：縄文時代の遺物はあまり多く出土しなかった。主に古代末～中世にかけての遺物が主体を占めている。

出土状況については以上のとおりである。以下に遺物の説明を記載する。

縄文～弥生時代の土器

○縄文時代前期の土器（1～5）

1は円筒下層a～b式と思われるが、胎土への纖維の混入が少ない。2は円筒下層c～d式、3～5は円筒下層d 2式と思われる。これらはいずれも磨滅が激しい。

○縄文時代中期の土器

6・7は円筒上層b～c式と思われる。この2点も風化が激しい。8・9は榎林式とおもわれる。折り返し、肥厚した口縁部に沈線が施される。体部には、断面が丸く幅広な沈線が施されている。11～15・17～20は最花式である。口縁折返し部分に無文帯を設け、その下位の体部に縄文・沈線・円形刺突等の装飾を施している。16は壺形の土器である。外面は地文が無文であり、頸部や体部に隆線による装飾が施される。頸部には隆線のほかに橋状把手が見られる。体部のモチーフには2本一对の隆線による溝巻き・垂線・水平線等がみられる。これらは榎林式の体部モチーフに通じるものがある。21・22・24・25は大木10式並行期の土器である。24には磨消縄文が見られる。

○縄文時代後期の土器

23・27は後期初頭～前葉の土器である。23は小型の壺、27は深鉢形土器と思われる。

○縄文時代晩期～弥生時代の土器

28は縄文時代晩期の台付鉢であると思われる。29～34は縄文時代晩期終末～弥生時代前期前半の土器と考えられる。29・30は鉢と考えられ、口縁部には山形の突起が見られる。29の外面には縄文地に工字文が施文されている。31は浅鉢と思われる。外面には変形工字文が施文されている。32・33は小型の深鉢と思われる。32の口縁部には2条の並行沈線が見られる。34は広口壺と考えられる。口縁端部は短く外側に屈曲する。体部最大径は器高の1/2よりやや上位にあると思われ。その付近で体部が緩やかに屈曲する。口縁部には6単位？の波状突起が付き、波頂部は二又になっている。口縁内面には水平方向に沈線が1条施文されている。口唇端部上面には沈線が施文されている。口縁直下には4本の並行沈線が施文され、口縁波頂部下位の位置に2個一对の小粘土粒が貼り付けられている。頸部には幅広の無文帯が設けられ、体部最大径の部分には地文縄文（R L斜位回転）に工字文と並行沈線が施文されている。（茅野）

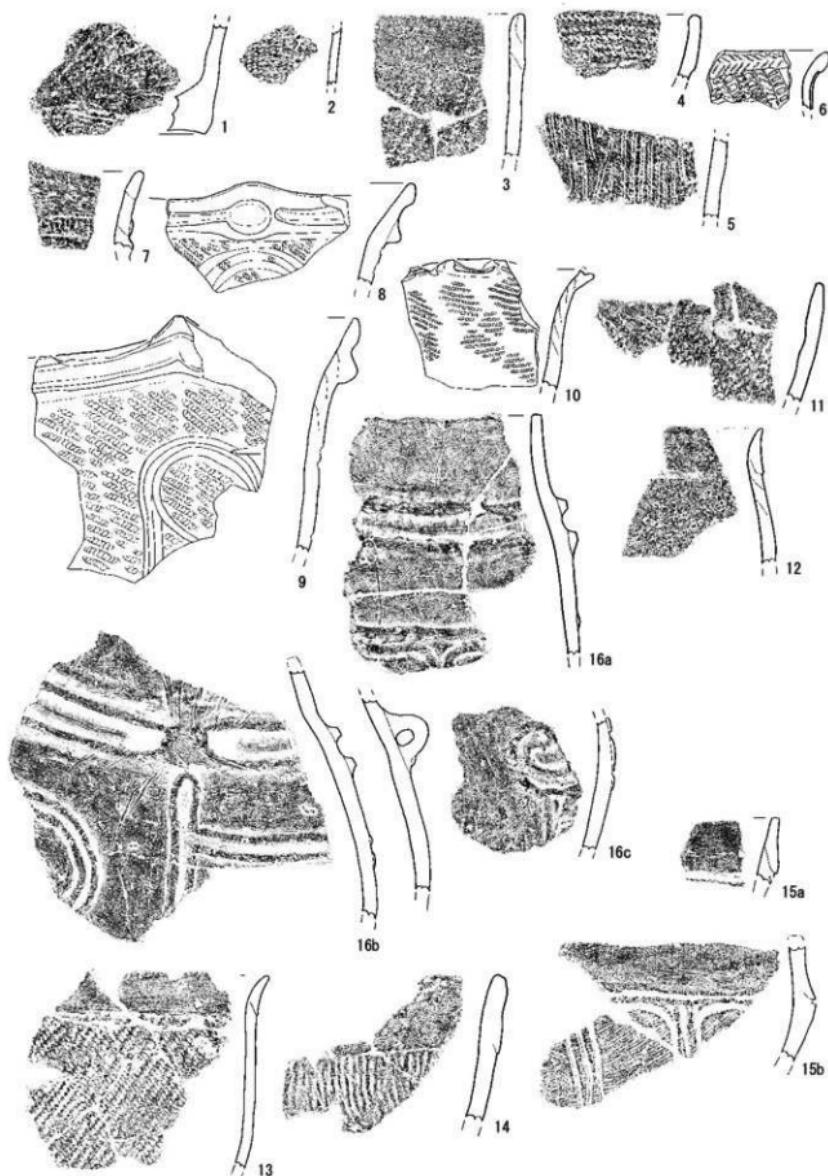


図10 遺構外出土遺物(縄文)－1

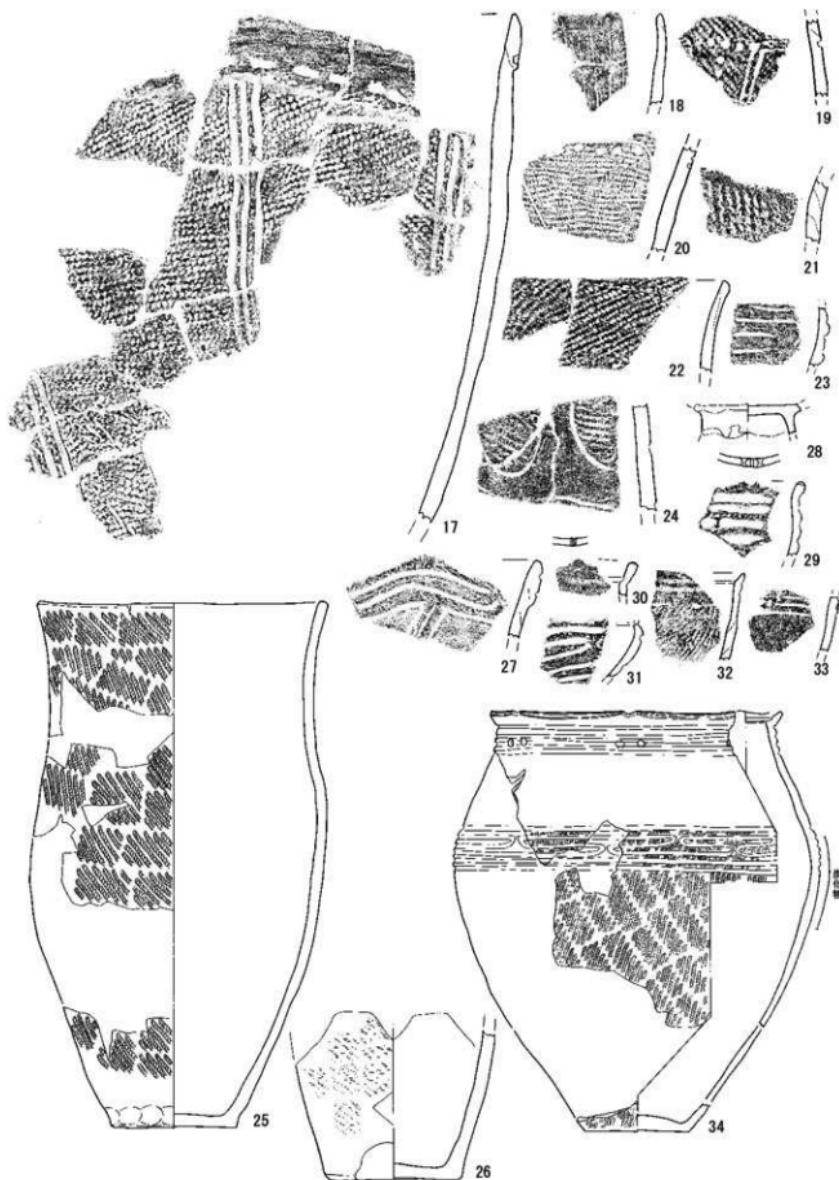


図11 遺構外出土遺物(縄文)-2

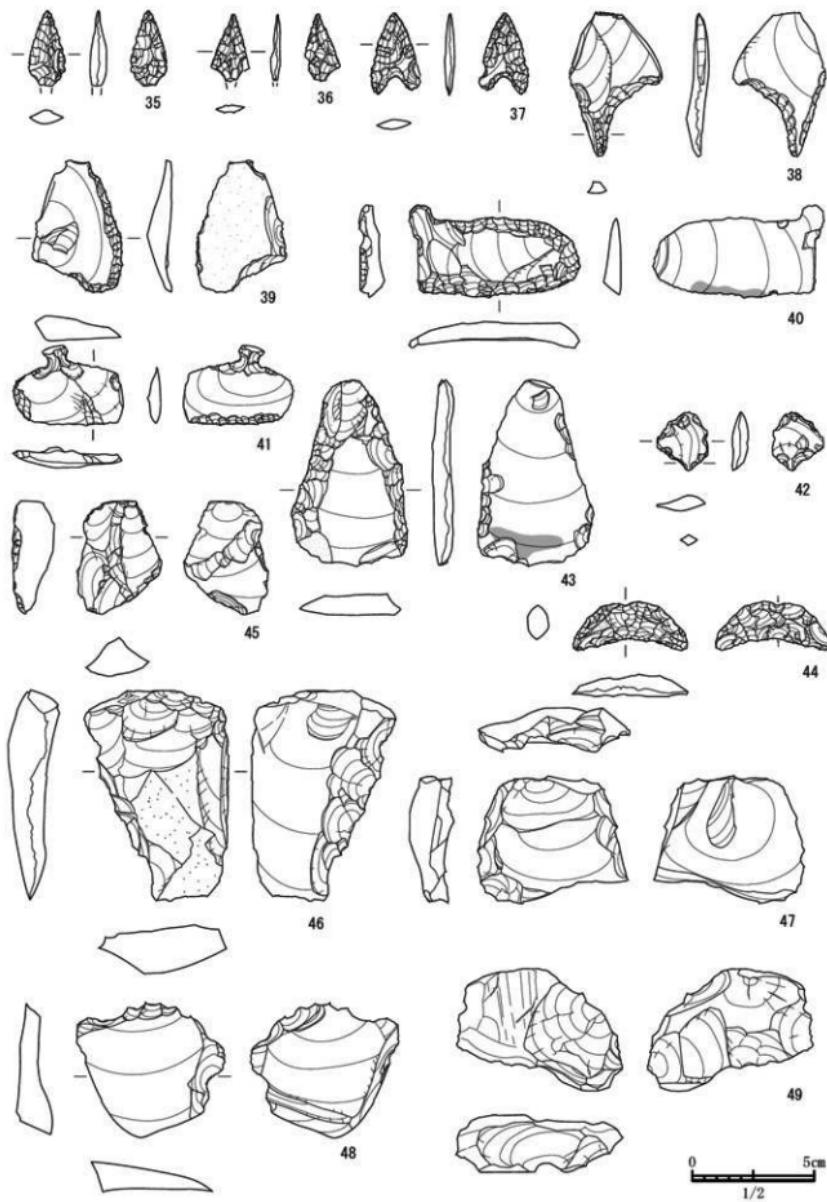


図12 遺構外出土遺物(縄文)-3

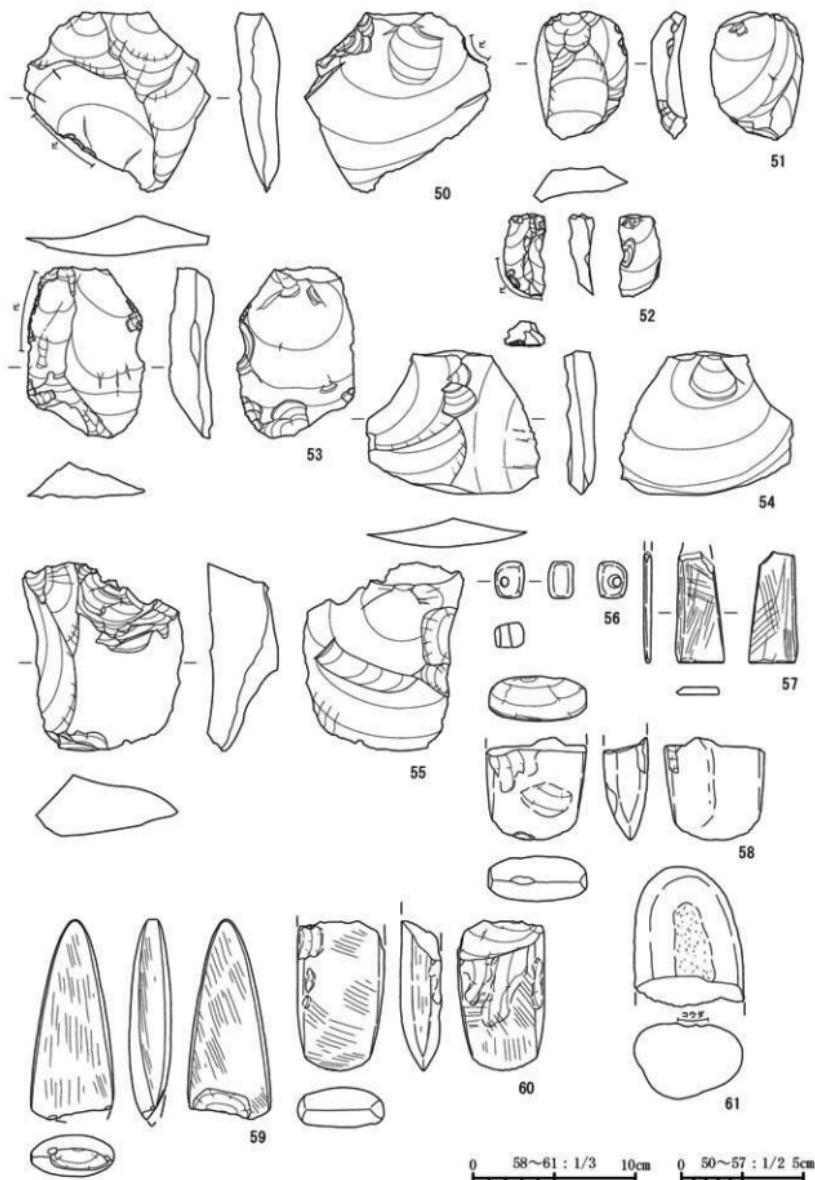


図13 遺構外出土遺物(縄文) - 4

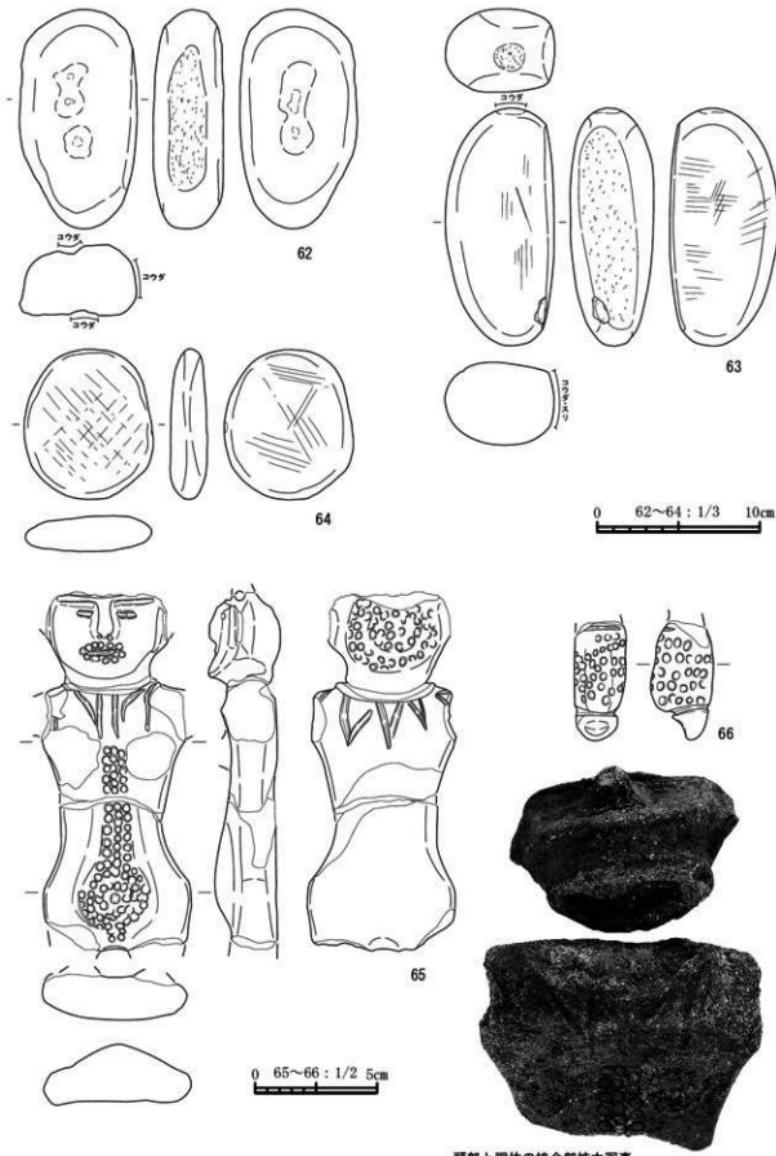


図14 遺構外出土遺物(縄文)－5

○土偶（図14）

IVS-198グリッドで出土した。出土状態は頭部・体部上半・体部下半がまとまって出土し、腕？の部分はやや離れた地点から出土した。頭部の上端・両脚・片腕を欠損する。中実で、体部と頭部は別々に制作されたパーツを最終的に合体させていることが破断面の観察から明らかである（写真）。腹部のふくらみと両胸の剥離痕（乳房部分）や、腰から尻にかけてのシルエットから、妊娠した女性を模していると考えられる。装飾は主に管状工具による円形刺突と沈線により施されている。円形刺突は腹部から乳房の谷間へかけてと、後頭部・口唇周辺に見られる。腹部周辺のものについては着衣の表現か刺青の表現かは不明である。ただし、口唇周辺にも円形刺突がみられるため、この部分に関しては刺青の可能性を指摘しておく。後頭部に関しては頭髪を表すのであろう。沈線は首から肩周りの正面および背面に見られる。これについても着衣の文様か刺青かは判断が難しい。腕？に関しては、先端部の弱いへこみを手のひらと判断したため腕？とした。体部とどのように接合するかは不明である。最後に、この土偶の帰属時期であるが、刺突の状態などから縄文時代後期後半に属すると考えられるが、周囲からは該期の土器がほとんど出土していないため、詳細な帰属時期の決定は困難と言わざるを得ない。（茅野）

縄文～弥生時代の石器（図12～14）

○石鎌（35～37）

尖基鎌（35・36）と凹基鎌（37）が出土した。35は赤鉄鋼製で赤く、器厚はやや厚みがある。36は基部と体部の境界が明瞭である。全体に丁寧な押圧剥離により整形されており、器厚は薄い。

○石錐（38・42）

2点出土した。38は素材剥片の鋭角な角を利用し、表裏両面から連続的に押圧剥離を施し錐部を作出している。42は赤いチャート製で、素材剥片の一部に簡単な加工を施し錐部を作出している。

○石匙（39～41）

39は縦型の石匙である。腹剥離面側の右側縁に刃部が作出されている。背面には原礫面が大きく残る。40・41は横型石匙である。40は縦長剥片の末端部付近に摘みを作出し、上下両側縁へ打点側に押圧剥離による二次加工が施され、刃部となっている。41は横長剥片の打点付近に摘みを作出している。また、左側縁には刃部の二次加工とは別種の細かい二次加工が施されている。

○石範（43）

末端部に向かって開く縦長剥片の両側縁に覆面側からの二次加工が施されている。刃部と想定される器体下端には明瞭な加工は見られず、覆面側には使用に伴うと考えられる光沢が肉眼で観察される。

○二次加工剥片（5～49）

剥片の一部分に二次加工が施されたもので、5点図示した。45は右側縁中央部分に弱い抉りが施されている。その外は直接打撃と思われる粗い二次加工が側縁などに施されるものである。これらは沢4からやまとめて出土する傾向がある。

○使用痕のみられる剥片（50～52）

剥片の一部分に使用に伴うとみられる微細な剥離が見られるものである。3点図示した。

○剥片 (53~55)

3点図示した。3点ともに直接打撃により剥離されている。

○異形石器 (44)

表裏両面に押圧剥離が施され、三日月形の形状を作出している。器厚は9mmと厚く、刺突具とは考えられない。裏面中央の上下端（→部分）にはすべての剥離を切る押圧剥離が施されている。器体整形が終了し、使用により起こった剥離か、意図的にその部分を抉ろうとしたかは定かではない。

○石製品 (56・57)

56はSF170の底面から出土したが、実際には沢3の堆積土中に包含されていたものと考えられる。翡翠製であり・器面は丁寧に研磨されている。中央部分には孔が穿たれている。57は块状耳飾りである。約半分が欠損している。粘板岩製で、正面形は細長い形状になると思われる。

○石斧 (58~60)

3点出土した。いずれも敲打・剥離成形の後全体を研磨して仕上げられている。

○敲磨器類 (61~64)

61は凹み石で片面の中央付近に敲打痕が集中する箇所が見られる。62は使用痕が複合している。両面中央付近には明瞭な凹みが見られ、右側縁には幅広で平坦な擦り面が見られる。63は擦り石である。62の使用面より滑らかな擦り面が形成されている。上端部には敲打痕が局的に見られる。64は表裏面に擦痕が見られる礫である。流紋岩製であり、擦痕は直行するようなものも見られる。用途などは不明である。（茅野）

第2節 古代以降の遺構および出土遺物

1、掘立柱建物跡および柱穴

概要

平成19年度の調査では、小ピットが2592基発見された。その多くは掘立柱建物跡を構成するものであることが調査段階で想定された（これらの深さについては表2に示した）。調査員高島成信氏による2度の現地指導により、多数の建物跡を検出することができたが、調査終了後も検討を繰り返した

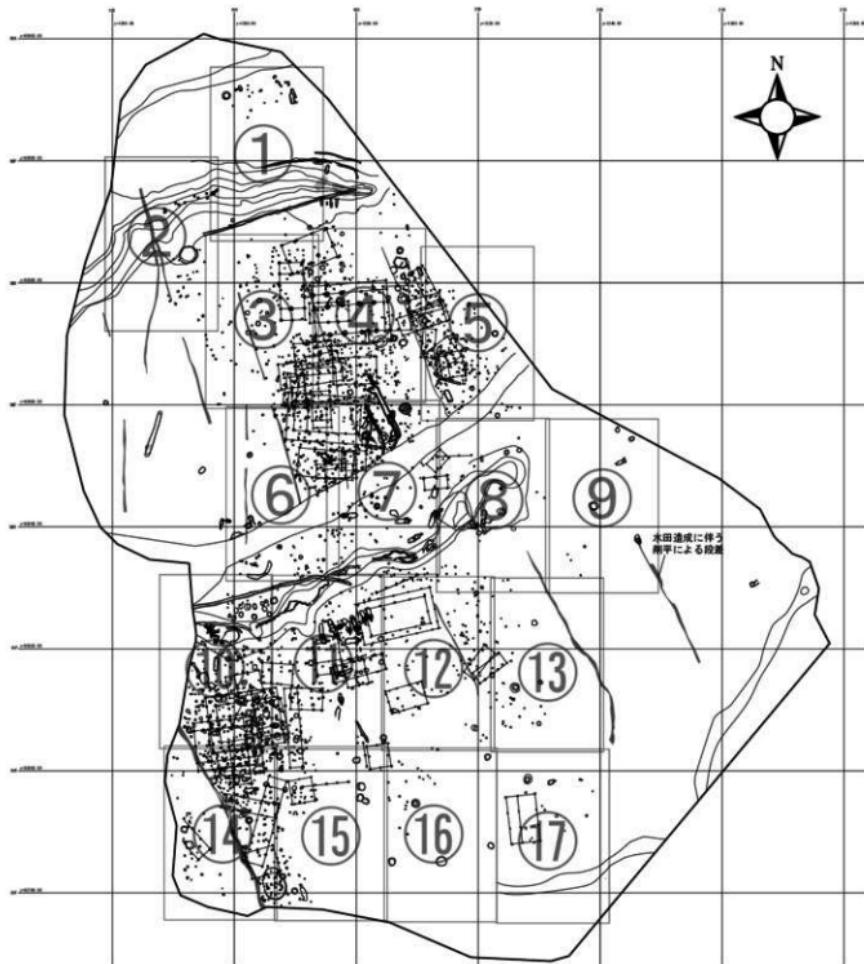


図15 掘立柱建物跡及び柱穴関連図面分割図

遺跡名	グリッド	身合		社間	柱間	行方役	複復関係	範囲内の遺構	出土遺物	想定される時代	特記事項	
		期間	形態									
SB45	IIIK-193	1周	2間	-	-	N=6°-E					網跡?	
SB46	IIIH-191	2周	2間	-	7.0-8.5	7.0-7.5	-	N=7°-E	-	SB135	-	
SB47	IIIH-201	2周	3間	-	6.0-9.5	8.0-9.0	-	N=6.0°-W	-	-		
SB48	IIIK-195					N=8.5°-W					網跡?, SB49の右側に切口	
SB49	IIIK-195	2周	2間	-	5.5-6.0	5.5-6.5	-	N=81.0°-E	-	-		
SB51	IVC-195	1周	2間	-				N=42°-E				
SB52	IVB-195	1周	2間	-	6.5	6.0-6.5	-	N=83.5°-E	-	SB329	-	
SB53	IVD-195			-		N=98°-E						
SB54	IVC-194	2周	2間	-	6.5-7.0	4.5-6.0	-	N=69.5°-W	→水路	SB03-24-25	-	
SB55	IIIH-188	1周	3間?	-	-	8.5	7.0-9.0	-	N=42°-W	-	SE122	
SB56	IIIK-190	1周	3間	-	-	9.5	7.0-7.5	-	N=6°-W	-	SK257	SK257出土(成跡)他の約4m後半なので、それ以前?
SB57	IIIH-190	1周	3間	-	-	8.5	6.5-10.0	-	N=15°-W	-	SE110	SE110の年輪年代が1327年のそれ以前
SB58	IIIH-191	2周	3間	-	南側(南仕切)	7.0-8.0	5.5-7.5	-	N=83.5°-E	-	SE133-SE134、SE111	SE133-SE134の年代がMS時代が14c後以降なのでそれ以前
SB59	IIIH-189	2周	4間	南北2面に 西側(南仕切)	7.0-9.0	7.5-8.0	4.0-5.5	N=99°-E	SE106-SE109 -SK257-261	-	SK257出土(成跡)他の約4m後半なので、それ以前	
SB60	VG-219	?	2間	南・東面に 底	-	8.0	10.5-11.0	-	N=90°-E	SD106	-	
SB61	IVT-220	1周	2間	-	南側(南仕切)	7.0	4.0-7.0	-	N=91°-W	-	-	
SB62	IVT-221	1周	4間	-	-	8.5	5.5-9.0	-	N=93°-W	-	SE82, SE59-62	網跡?
SB63	IVB-222	2周	3間	-	-	3.5-7.0	4.0-5.0	-	N=71°-E	-	SK135	-
SB64	IVB-223	2周	3間	-	-	5.0-9.0	4.0-9.0	-	N=12°-W	-	SD129	-
SB65	VQ-227	1周	2間	-	北東に 開口の 納戸?	6.5	7.0	-	N=74°-E	-	-	
SB66	VD-246	1周	4間	-	-	5.0	4.5-8.0	-	N=85°-E	-	SD110	-
SB67	VB-246	1周	4間	-	-	5.0	5.0-10.0	-	N=84.5°-E	-	SD129	-
SB68	VA-208	2周	2間	-	-	5.5-6.5	7.0-8.0	-	N=14.5°-W	-	-	
SB69	IVO-204	2周	2間	-	-	3.0-6.0	6.5-9.0	-	N=21°-W	-	SD125	-
SB70	IWL-267	1周	3間	-	-	6.0-7.0	6.0-8.0	-	N=62°-E	-	-	
SB71	IVJ-209	2周	4間	-	南東に 開口の 納戸?	5.0-8.5	4.5-9.0	-	N=75.5°-E	-	-	
SB72	IVI-210	2周	3間	-	北東に 開口の 納戸?	6.5-7.5	4.5-8.5	-	N=75.5°-E	? SK12	SD10	-
SB73	IVG-209	2周	2間	-	横井	5.5-6.0	6.0-8.0	-	N=75.5°-E	-	-	
SB74	IVP-208	2周	4間	西1分間 南仕切	-	6.5-9.0	6.0-10.0	-	N=3.5°-E	? SE12-SE19	-	
SB75	IVO-294	1周	3間	-	-	8.0	4.0	-	N=65°-E	-	SD99	-
SB76	IVW-248	2周	3間	-	-	8.5	5.5-6.0	-	N=6°-E	-	-	
SB77	IVB-250	2周	3間	-	-	6.0	4.5-6.0	-	N=15°-W	-	-	
SB78	IVM-198	1周	3間	-	-	10.0	7.0-8.5	-	N=4°-E	-	→SK18-19-SD10	
SB79	IVB-251	1周	4間	-	-	8.5	4.5-8.0	-	N=11.5°-W	-	-	
SB80	IVW-213	2周	3間?	-	-	3.0-6.5	5.0-9.0	-	N=66°-E	-	-	HS801
SB81	IVI-206	1周	2間	-	-	7.0	7.5	-	N=77.5°-W	-	SK112-113-140h	-
SB82	VB-267	1周	2間	-	-	7.5	6.0-6.5	-	N=80.5°-W	? 葵穴C3-2	-	
SB83	VD-267	1周	2間	-	-	8.0	6.0-9.0	-	N=33.5°-W	? 葵穴C3-2	-	
SB84	IVT-226	2周	3間	-	西側(南仕切)	6.5-8.0	6.0-8.0	-	N=82°-W	-	SD570	
SB85	VC-249	1周	2間?	-	-	4.5	4.5-7.0	-	N=85.5°-E	-	-	網跡?
SB86	VC-248			-		-	-	-	N=8.5°-W	-		網跡?
SB87	VD-248			-		-	-	-	N=85°-E	-		網跡?
SB88	IVS-220	2周	3間	-	-	7.5-8.5	6.0-7.5	-	N=89°-W	-	SE59-59-60-63· 77, SD62 66-72-73-77-106	-

結果、B区から55棟(内網跡4箇所)の建物跡を検出することができた。それらについての建築史的側面からの検討は付章を参照していただき、ここでは検出した建物跡に関する基本的な事項を一覧表(表1)にまとめ、得られた結果をもとに建物跡の特徴を説明する。

表1には高島成侑氏とのやり取りの中で検出された建物跡(SB01~)の諸属性をまとめた。この表には付章に記した過去調査区の検討から抽出された建物跡(SB60~)の諸属性も記してある。また、図34~36には個々の建物跡図面を掲載し、図16~3・204~218には構造配置図から建物跡に関連する部分の図面を100分の1で掲載した(図面上が北である)。

SP計測値-6

SP番号	深さ(cm)	SP番号	深さ(cm)	SP番号	深さ(cm)	SP番号	深さ(cm)	SP番号	深さ(cm)	SP番号	深さ(cm)	SP番号	深さ(cm)	SP番号	深さ(cm)
4646	10.4	4660	8.8	4675	15.6	4690	6	4703	2.4	4718	6.8	4733		4755	14
4647	22.8	4661	11.6	4676	20	4691	4	4704	12.4	4719	9.6	4734	9.6	4756	16
4648	13.6	4662	5.6	4677	33.2	4692	8.8	4705	3.2	4720	4	4735		4757	15.2
4649	10.4	4663	23.6	4678	5.6	4693	8.6	4706	6	4721	31.2	4736		4758-A	9.6
4650	12	4664	14.8	4679	10.8	4694	2.8	4707	4	4722	16.4	4740	4.8	4758-B	10.8
4651	33.2	4665	13.6	4680	11.6	4695	14.4	4708	14.8	4723	6	4741	54	4759	3.6
4652	9.6	4666	13.2	4681	10.8	4696	26.4	4709	9.2	4724	29.6	4742	20.8	4760	8.8
4653	10	4667	24.4	4682	21.6	4697	14.8	4710	22.8	4725	20	4747	17.6	4761	11.6
4654	18	4668	9.2	4683	14	4698-A	41.2	4711	17.6	4726	3.6	4748	22.8	4762	5.6
4655	8.8	4669	12	4684	36	4698-B	38	4712	2.8	4727	6.8	4749	32.4		
4656	12	4670	14.4	4685	38.8	4698-C	36.4	4713	25.6	4728	10.4	4750	17.6		
4657	15.6	4671	10	4686	9.2	4699	24	4714	8.8	4729	16	4751	28		
4658A	9.6	4672	7.6	4687	24.4	4700	2.8	4715	18	4730	9.6	4752	19.2		
4658B	10.8	4673	11.2	4688	7.2	4701	19.6	4716	9.6	4731	18.8	4753	21.2		
4659	3.6	4674	6.4	4689	4.4	4702	2	4717	4.8	4732	15.2	4754	18.4		

建物跡の種類について

検出された建物跡は梁行と桁行及び底等の付き方により大まかな分類をした。

梁行3間のもの：SB26が1軒だけ検出された。

梁行2間で4面に底が回るもの：SB07・27の2軒検出された。

梁行2間で2面に底が付くもの：SB01・59の2軒検出された。ここまで5軒は軸方向がおおむね東西方向を向く。

梁行1間で1面に底が付くもの：SB38・47 2軒検出され、南北と東西の軸方向がある。

梁行2間で間仕切りをもつもの：SB02・22・23・25・28・35・37・58 8軒検出され、内5棟が南北方向を向いている。

梁行2間・桁行2間のもの：SB11～13・33・44・46・49・54の8軒が検出された。その内、総柱のものは3軒である。

梁行1間のもの（桁行は2間～6間がある）：SB03・04・05・06・08・09・10・14・15・19・32・36の12軒が検出された。内6軒が東西方向を、5軒が北東一南西方向を、1軒が南北方向を向いている。

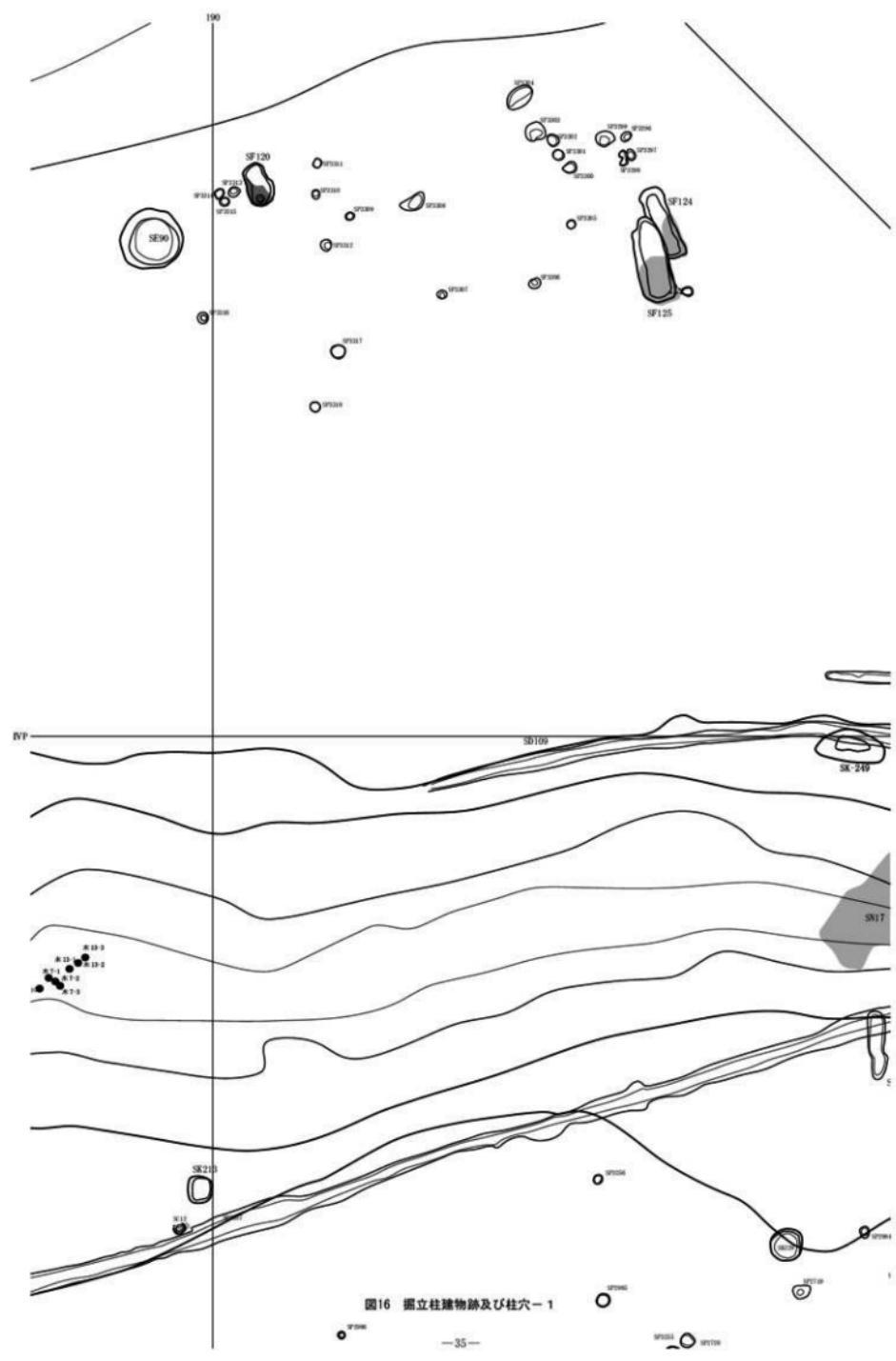
梁行2間・桁行2間のもの：SB11～13・33・44・46・49・54の8軒が検出された。その内、総柱のものは3軒である。

建物跡の軸方向について

厳密な規則性は見られないが、先に述べたとおり図34に示したような大型の建物跡は桁行方向が東西方向に近い傾向がある。また、小規模なものの梁行2間のものに関しては、桁行方向が東西或いは南北方向に近いものが多い。

柱穴掘方と柱痕について

柱痕については積極的に検出を試みた（図中には網かけで図示）。しかし、確実に柱痕と思われるものが検出できたのはSB01に関連する柱穴のみである。他のものは柱痕と掘方の大きさがほぼ同規模であるもの多いため、掘方埋土と柱痕覆土を明確に分離できたものは少ない。SB01の柱痕は他の建物跡より大きく、掘方も立派である。



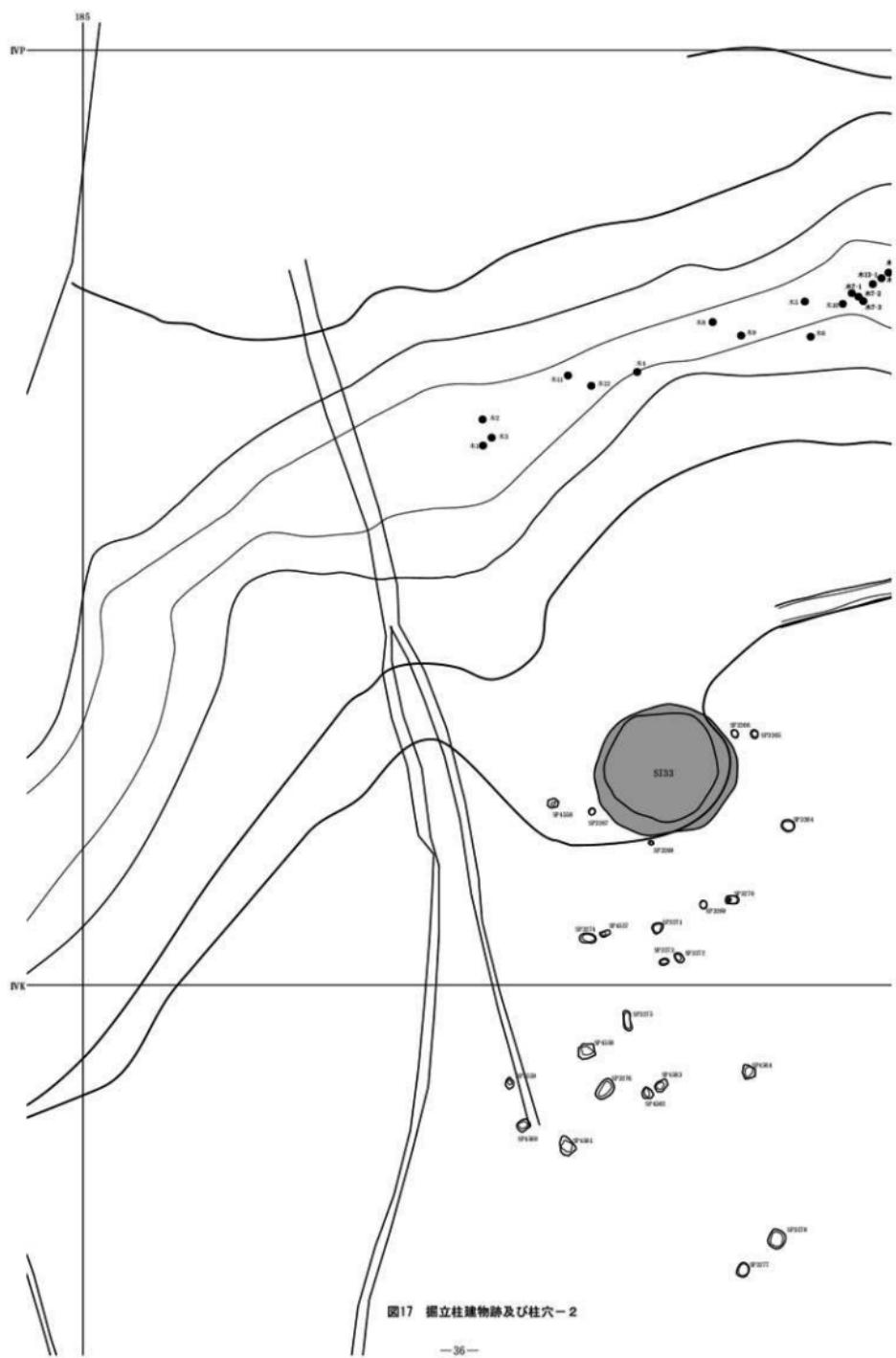


図17 捜立柱建物跡及び柱穴－2

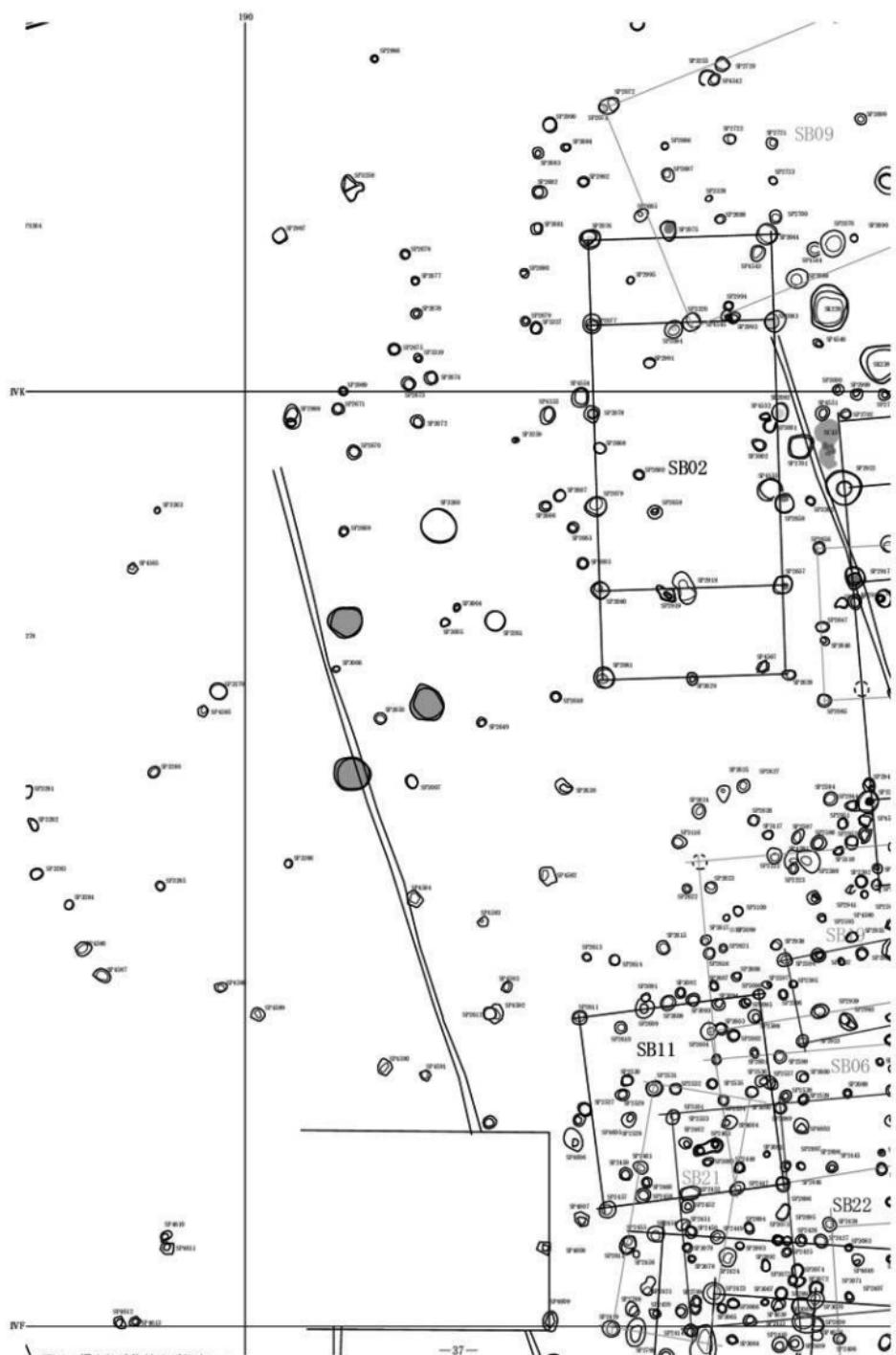


図18 据立柱建物跡及び柱穴-3

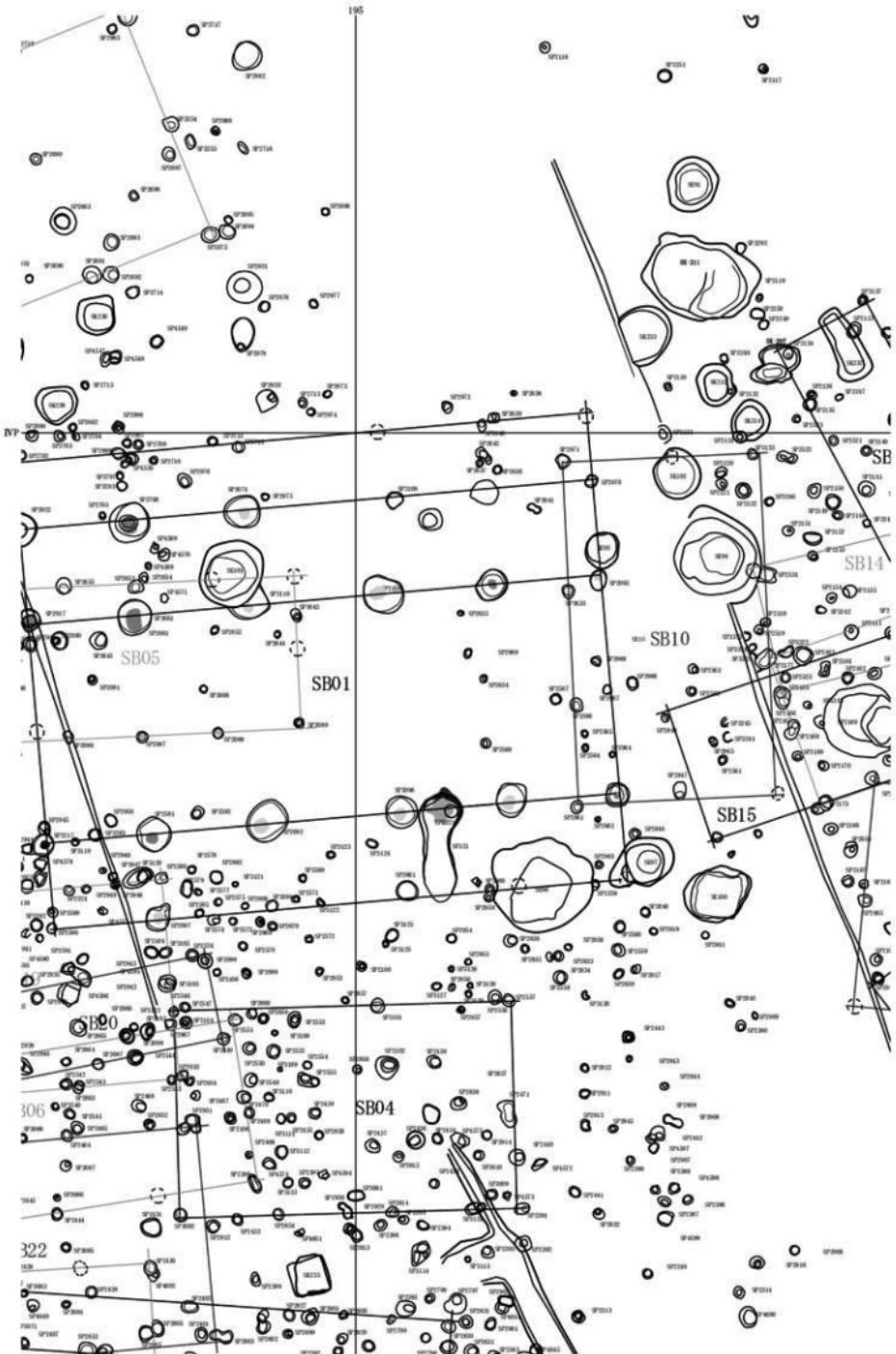


図19 据立柱建物跡及び柱穴-4

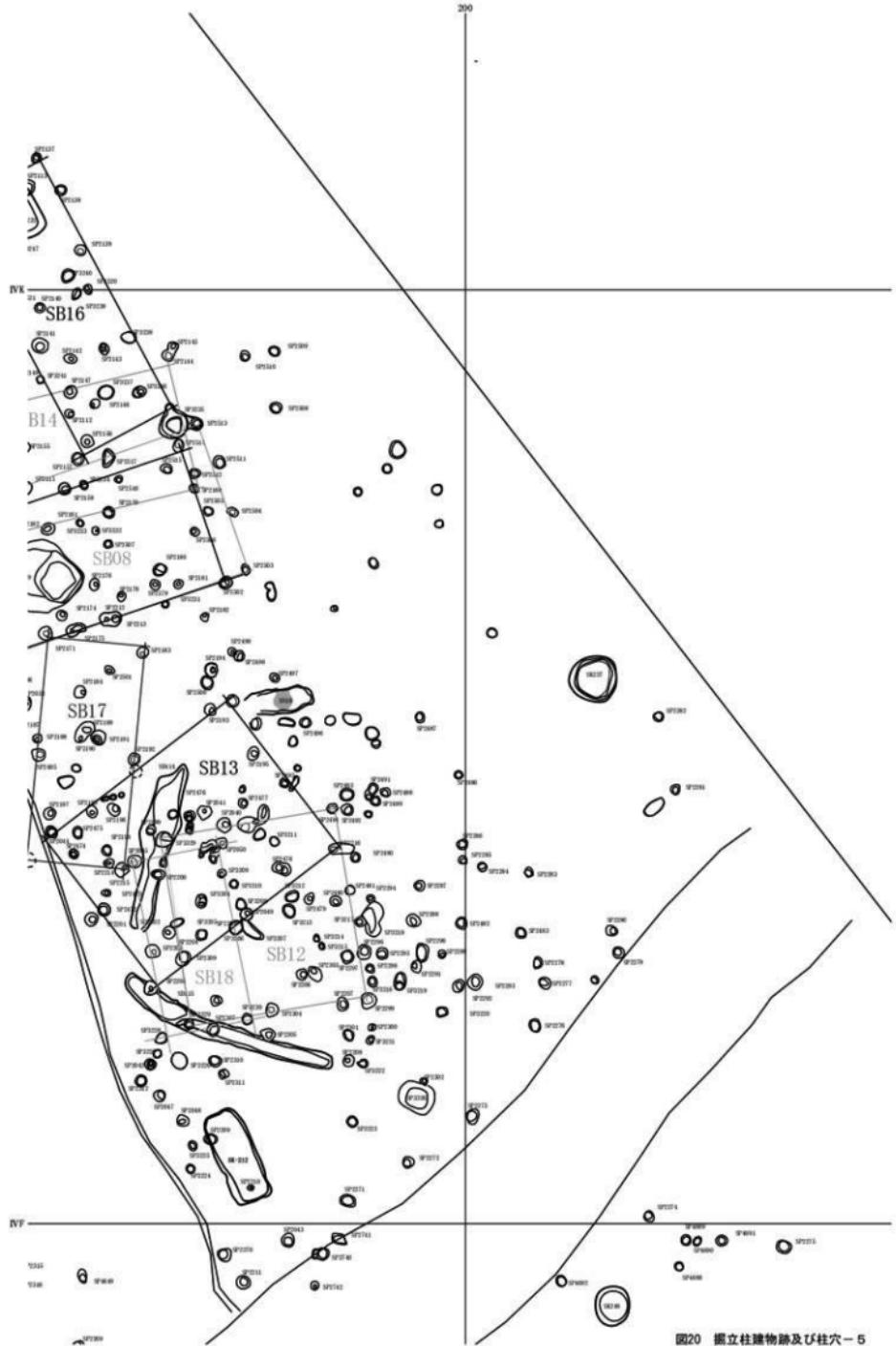


図20 摺立柱建築跡及び柱穴-5



図21 捕立柱建物跡及び柱穴-6